江口草玄の未公開資料（二）　昭和六十一年（一九八六）―平成三年（一九九一）

松矢　国憲

昭和六十一年（一九八六）

一月五日／『山階通信』一月発行号印刷／②-14

「維馨尼の与板」第3稿、印刷。

【解】　前年十二月二十三日「維馨尼の稿」、同月二十四日「維馨尼の稿。なかなか進まない。」の記述、手帳②-13に有り。また、翌一月六日「第3講、ホッチキス止め、及、発送の為の宛名書き。」、同月十三日「「維馨尼の与板」第3稿、発送。」の記述、同手帳②-14に有り。

一月十五日／《浮雲》の制作／②-14

午后小山行。／（中略）／「浮雲」書く。

【解】　翌々日十七日「午后、小山行。「浮雲」持ち帰り。」の記述、同手帳②-14に有り。《浮雲》（白寿p188、S63-2-21）か、それ以前の作か不明。

一月二十七日／『山階通信』二月発行号執筆と《莫向外》の制作／②-14

午前、「維馨尼の与板」検討。なかなか、うまいフィニッシュが出てこない。／午后、小山行。「莫向外」他。冷めたし。／指先が凍傷寸前くらい。

【解】　同年一月二十四日「終日、「与板」草稿。」の記述、同手帳②-14に有り。《莫向外》は未見。写真アルバムに無し。ただし、《莫向外》については、《山階通信》（二）、翌六十二年（一九八七）四月二十日発行号に「雫まかせ(11)／　○と□」と題し、記述有り。以下、その箇所。「雫まかせ(11)／　○と□／　一九八四年の磯部南海雄との二人展の直後からなのだが、これまでしばらく平がな語を書いてきたのでさてこんどは漢語をと思い決めてとりかかったところが、これはどうしたことか、覚えさせておいたはずのわが右手の奴、すっかり怠け者になっておって、漢語が書けないのである。気がすっと墨の中に溶けて乗っていってくれない。／　こんちくしょうとばかりに全紙六枚八枚を並べておいて、でっかい紙面にでっかく書くことにした。もちろん、臨書。坊主の遺偈。そして大灯、大雅堂、とつづいた。それが面白くて面白くて、ついにまるまる一年以上、漢語の作品づくりのことなど放っておいて、臨書に明け暮れていたのであった。／　そのことはまた、漢語が自分の中になかなか熟さなかったせいもある。で、ようやく一九八五年の十二月、「莫向外」、外を向くなかれ、が漢語書き復活第一号であるのだが、しかしそれから一年半にもなるというのに作品として一応残しているものは、まだ十点を越えない。最終的な選別をするとなると、もっと少なくなるだろう。／　平がな語から漢語書きへはたやすく移れると思っていたのに、このていたらく。もともと量産のできないタチなのだが、それはそれぞれのもつリズム、息づかいの違いなのだろうか。どうも歌の序にも見えるように、ひとのこころの〝あはれ〟とか〝やはらぎ〟を乗せようとしているのに比べて、『説文』以来の文字学の伝統を背にする漢字の、いわば、格の違いがあるような気がする。／　漢語のもつ厳乎たる気格というものと、かな文字語が包み込んでいるところの気風との違いにかかわるところのことになるような気がしてならない。罪はわが右手だけのことではないように思う。／　漢語は□（カク）で、平がな語は○（マル）、と言ったらよいだろうか。ともかく、○的気質のこちらに強調融和させながらも□の格において書き出だすべしとしているのが、漢語書きにおける今のわたしの覚悟である。」

日付不明（一月十九日以降―二月十七日の間）／良寛への興味／③-9

良寛の悟りきった姿に皆はサンタンし、散眼する。しかし実は、本態はカイギャクの人、俳諧の人。／［「暁鳥敏」（註三十）の項］／維馨尼に興味をもったのも良寛に流れて燃えていた赤い血への興味であったのだ。

（註三十）　あけがらす　はや（明治十年―昭和二十九年（一八七七―一九五四））。真宗大谷派の僧侶、高浜虚子に師事。

二月七日／『山階通信』二月発行号ガリ版切り／②-14

ガリ版切り

【解】　翌八日「ガリ版切り」、同月十一日「終日、印刷」の記述、同手帳②-14に有り。

二月二十二日／鉄斎書の臨書／②-14

午后、明日持参用の鉄斎臨書。

【解】　翌二十三日「午后から例月の集まり。全員揃う。珍らし。」の記述、同手帳②-14に有り。

日付不明（二月後半―三月二日の間）／維馨尼の憬れ／③-9

憬（ママ）れとは、心が身を離れることを言うという。心がすっかり身を離れてしまえば、それは、死を意味することだという。死とは、つまり憧（ママ）れの独立したものである。／維馨尼は虎斑の一切経購入の執念に一途の憬（ママ）れをもった。また良寛への幼ななじみの、奇しき因縁の絆につながる強い憬（ママ）れを抱きつづけた。この小さな小屋をついのすみかの庵／終の二つのその憬（ママ）れのはざまでさ迷い、かくさ迷う。憬（ママ）れはついに独言して、維馨尼をして死へとみちびいていったのであった。／終

の栖の庵として維馨尼は／住処／ついのすみかの

【解】 この日付不明の記述は③－9の雑記帳の記述順から三月から五月ころと考えられるが、『山階通信』同年三月発行号「維馨尼の与板（五）」中に「まさしく奇しき因縁の絆につながれた良寛への強い憬れがまた維馨尼には、消すことのできない、心に深いものであった。／　良寛でもよい。虎斑でもよかったかもしれない。とにかく、世間なみの世すぎ身すぎに浸りたかったであろうに。それがかなわぬまま、この小さな小屋を庵にして住む維馨尼は、日がな一日、思うことの多きを押さえ閉じて無為に過したことも再々であったにちがいない。胸につかえた重さゆえに終日蟄居、尼僧とはいえ乞われて他家に経を唱えにいくわけでもなかった維馨尼であっただろう。／　虎斑と良寛という、心奪われた二人への強い憬れのはざまでさ迷い、斯くさ迷う維馨尼のわが心わが身の終の栖がここであったのだった。」という類似の記述があることから、二月後半から次記述三月二日のガリ版切りまでの間の草案メモと考えられる。

三月二日／『山階通信』三月発行号ガリ版切り／②－14

ガリ版切り

【解】 翌三日も同じ記述有り。同月十七日「終日、手紙書き、ガリ版第5稿発送。」の記述、同手帳②－14に有り。

三月十五日／下坂守「かなの美」講演への感想／③－9挿み込み

［61．3．15］下坂氏の言うところの線の美しさの基準◎［優美さ］。／鎌倉期のものは？品格×のことだろうか。「筆がおちる」／○女房ことば／○約束ごとの、記号化してしまう／○署名に、平仮名一文字の場合有→「ひ」（東御所）／平安後期最盛期であったが、鎌倉期から、書の暗黒期に入る。（何故）／桃山から江戸書（ママ）（初の誤りか）期にまた仮名の美が復活してくる和歌の為の美と、仮名消息の美〈美しさ、そのものの設定が無かった。漢字の美しさとの違いを、上記のせいと□（不明）□（不明）している〉

【解】 下坂守、京都国立博物館名誉館員。下坂の講演資料に本記述が書き込んで有る。

日付不明（二月後半―三月十六日までの間）／**研修会での臨書研究／③－9**

臨書［表現］―とした意図。十人十様の臨書が為されなければいけない。勿論、上等はいいとしても、下等は訂正してやる必要あり。

【解】 次記述の日付不明と併せて、後掲、同年四月二十八日記述、それに続く日付不明の三つの臨書指導に関する記述および、同年五月十九日の記述に見られる大阪の高校での研修会の事前準備の記述と思われる。

日付不明（二月後半―三月十六日までの間）／**研修会での臨書研究／③－9**

［分類］自分の専門以外がわからないということは、己れの目がいけないからだ。目をこやす努力眼要（ママ）。／○教わる、教えるでなく皆が互いに考え合う中でお互いに教わる、教えるという二日間にしていきたい。充実した二日間の時間にするもしないも、皆様、お互の心組みにあるかと思うので。

日付不明（三月十六日―二十二日の間）／愚人会作品集のための草稿／③－9

序文を書かされるが／愚人会のエン革を説明する立場ではない。そもくのなれそめは、「愚人会の発生当時にさかのぼる。が、この人たちを本腰入れて指導したおぼえはない。彼らは彼らなりに、書という、易業にして難業なこの道をそれぐが歩きつづけてきたのだが、その間、書について議論し合ったことはない。ただ酒を呑み合うだけだったように思う、もっと、口角アワをとばして、げき論をたたかわすあい（以下×で全体を消してある）だがらでありたかったとは今、思う。彼らは沈黙の人だったのだというわけではないが、なぜかそういう結果になっているのである。

【解】 手帳②－14の同年三月二十九日に「公森君宛。愚人作品集用の文、送る。」とあり、その草稿と考えられる。公森仁、山川正道ら佛教大学ＯＢで作る愚人会作品集のために「亀玉の冊」の原稿を書いていることが、『山階通信』同年五月発行号に記述されている。『山階通信』には、「六月一日ころ出来上りの予定」と記述されているが、同作品集の発行は、半年遅れたようで奥付に「一九八七年一月一日発行」と記載されている。

三月二十二日／五浦展を見ての感想／③－9

3／22大阪、三越、五浦展。［闇がそのままで光となる。］初め感度にぶきも、見ているうちに、それなり。天心の「東坡騎驢」図の稚拙さ。／春草のチ密。しかし、「波頭の月」の光の（分離）／偏平、浮き上がり、密着なし。／タゴールの詩／闇より、光…

【解】 「五浦の五人展」（三月十八日―二十三日、大阪・北浜　三越7階アート・フォーラム）の半券、同雑記帳③－9に挿み込み有り。

三月二十三日／富岡鉄斎書碑採拓旅／②－14

朝9時半出発、信州飯田の鉄斎書碑採拓行。夜、昼神温泉着。雪。

【解】 同月二十三日から二十五日帰着で、信州飯田の富岡鉄斎書碑の採拓旅行に仲間数名と出かけている。翌二十四日「寒い中、採拓、曇天、時々、小雨そして小雪。」「翌々日二十五日「晴天。午前中採拓。午后市内の古物店めぐり。5時出発。夜11時帰宅。」の記述、同手帳②－14に有り。

三月二十七日／エヘンの碑採拓／②－14

久幸来り。エヘンの碑採拓。

【解】 雑記帳類③－9にエヘンの碑の寸法が略図と共に記されている。／(高)142㎝、(巾)70、(篆額部高)51、(巾)56／また、手帳②－14同年二月二十四日の記述に「午后、神楽江巻石の件で、市役所、市歴史資料館行。ダラダラとした役に立たない役人の後、龍安寺西、住吉神社宮司と会い、「エヘンの碑」有り。吹雪、つめたし。体、冷える。」有り。

三月二十九日／石川九楊展を見ての感想／③－9

朝日会館での現代中国書画展及び、河原町三条東、志津屋三階での石川九楊展行。両者とも、筆技ではあっても、手と人、筆と人間とが分離している。技術と技巧の区別不明。特に石川のは、全く書とは言えない。デザインとしかいいようがない。「これが新しい感覚の書道だ」と言う声を会場内で聞いて、「新しい感覚」への疑問盛んに出る。

三月三十一日／『墨』原稿用下調べ／②－14

〝墨〟の為の稿、下調べ。

四月一日／『墨』原稿完／②－14

一日かかって、〝墨〟の為の、近代芸術家の書についての稿、完。二枚というが、100字オーバー。

【解】 『別冊墨』第五号「近代芸術家の書」(同年六月二十日発行)に「不如学」として掲載有り。また『山階通信』同年五月発行号に、「別冊第五号『近代芸術家の書』を企画したから、好きな芸術家の書についてその理由と共に反論でもよいから何か書けという。字数は八百字。短すぎて〝反論〟どころか、何ほどのことさえ書けようかとは思ったが、OKした。というのも、東京赤坂のサントリー美術館で開催されていた「近代芸術家の書」を昭和五十五年六月二十二日に見たその印象が、まだ消えないでいたからです。」と記述有り。同月四日「〝墨〟太田氏宛、原稿発送。」の記述、同手帳②－14に有り。

四月二十八日／研修会での臨書研究／③－9

4／28臨書表現について／次回のときには、例えば「自分の方に引っぱり込む」、ということへの返発(ママ)。このとき、すぐ返事したが、(反論、説明)。他の人の意見の出揃うのを待ってから返答することにしたい。／「追体験」言葉じりをとらえての反論質問

【解】 本記述と同様、この研修会について草玄は満足していなかったようで、手帳②－14の同日に「午后2時から、大阪今宮高校での研修会行。熱気無くあきれ。」の記述有り。

日付不明(四月二十八日―五月十九日の間)／**研修会での臨書研究／③－9**

克明仔細な観察、コクメイな報告記述に感銘いたしました。開通褒斜道をはじめとする、石門摩崖刻石にかかわる原石に直かに触れられたことへの羨ましさは、ねたましくもありました。／口で言うほどには手は、わが意の如くになってくれない、未熟な私ではあるのですが、共に臨書し合い、また、表現技術について語り合うことは無益ではないと思われます。

日付不明(四月二十八日―五月十九日の間)／**高校書道教科書批判／③－9**

或る必要があって、九社から刊行され(て)いる高等学校書道の教科書に目を通しているとき、おや、これは少しおかしいのではないかと思われるふしがあるので、そのことを記してみることにする。それは「臨書」の意は、その目的にかかわることである。／各社別に列記してみる(以下記述無し)

日付不明(四月二十八日―五月十九日の間)／**研修会での臨書研究／③－9**

先回の臨書について直言すれば、目を閉じた状態、臨書のつまらなさ。臨書の楽しさが、しっかりつかまれていないのではないかと思った、／○「問題意識の皆無」／質問が出なかったことへの失望、(義務で出席しているのと違うか)(註三十一)／私が主催しての臨書研究の時間を一回もちたかった。／[5／11 5／18]計画したが、会場と原田先生(註三十二)の都合で、延期になった。私は集団も持っていないし、弟子は取っていない。だから、自分の方へ引っぱる為ではない。一人でも多くの人が、世界の入る目になってほしいが□□□(不明)で、もし希望あらば、受容、の姿勢。教え教わる〃(「の姿勢」のこと)の排除こそ物造りの第一歩。もっと、湧いてこそ。／[日展へ出すのに手本を書き与え、手本を拝し頂く]馬鹿くしさ←これを不思議がらない体質、おかし。／[湧く心なくして何で物作りといえようか。]／○今日は、前回の轍(テツ)をふまぬように、お互い心していきたい。

（註三十一）　前掲、同年四月二十八日の記述、大阪今宮高校での研修会を指すと思われる。

（註三十二）　原田正憲、大阪府立桜塚高等学校書道科教員を二十五年勤める。草玄の『ひびき』誌を見て、影響を受ける。サークル仲間。

日付不明（四月二十八日以降か）／**古典と筆**／③－9

［宋陳標］／・兎の毛を用いるのが正しい―南、短、軟／□□（不明）／―北、長、勁／長□□（不明）／婉欠／・ときに、狸毛、鼠鬚（そしゅ）を用いた／・鶏毛等は結局軟弱で、これを用いるは、ものずきのきらい也。／・蘭亭叙は鼠鬚筆を用い、鐘繇、張芝もみな之を用う。／木村防山「筆」捌筆―巻心筆（広沢（註三十三）在世の元禄期、一般に使用されていた。巻心筆＝有心（芯）筆、麻紙を芯に紙と毛を交互に重ね合わせて括る。何故、有心なのか、―墨含みの問題か。腰巻筆、鄭文公碑等の書丹は、どんな筆であったか。

（註三十三）　細井広沢（万治元年―享保二十年（一六五八―一七三六））、儒学者、書家。

五月十二日／**『山階通信』五月発行号ガリ切り**／②－14

ガリ版、切り始める。

【解】　同月十六日も「終日、ガリ切り。（山階通信五月分）」の記述、同手帳②－14に有り。

五月十七日／**ガリ切りと《白雲》の制作**／②－14

ガリ版印刷。午后4時完了。それから小山行。久しぶり也。草取り。山ショ、大きくなって、木の芽作りは駄目。二、三枚書く。中の「白雲」無造作に出来たか。

【解】　《白雲》は、前年の《白雲》（白寿 p185、S60-F-1）の延長上の作品か、または（同 p187、S63-2-17）の前段階か、それとも大きく違った作品か不明。

五月十九日／**臨書指導**／②－14

大阪清水谷高校での、第二回研修会出席。終って原田さんとビール後、京都で一杯が二杯。帰宅12時過ぎ。もう一つ、心に満足しない故の酒也。

【解】　前掲、同年四月二十八日および、日付不明（四月二十八日―五月十九日の間）の記述と同一の研修会の二回目の記述と思われる。

五月二十二日／**『山階通信』五月発行号の不首尾**／②－14

夜、諸橋氏からＴＥＬ。山階通信5月号の私信の件。一寸、載せたのは軽率のそしりをまぬがれぬか。

五月二十三日／**『山階通信』五月発行号の回収**／②－14

早朝諸橋氏からＴＥＬ。山階通信を回収することにして、ＴＥＬと速達書き。

【解】　前日の記述を含め、諸橋氏は『日本学』編集人の諸橋宏敞。『墨』六十号（同年五月号）掲載の諸橋「書のフォークロア「青木香流への挽歌」を草玄が読んでの感想を諸橋の許諾なく、草玄が『山階通信』五月発行分に掲載したことに不満で、諸橋から電話があり、『山階通信』が回収された。草玄は、現書壇の師弟関係の中での香流の位置や、香流《じょんがら幻想Ⅱ》の取り上げに異論を説いたためと思われる。回収分の記述が、別資料に残る。

六月一日／**《白雲》小品**／②－14

「白雲」小品、持ち帰る。

【解】　前掲、同年五月十七日記述と同一の《白雲》か不明。

六月二日／**難産の制作**／②－14

午后、小山行。書けない。言葉が無い。

六月六日／**無為**／②－14

終日、何ということなし。維馨尼補遺も進まず、気のりせず。山階通信をトジる（ママ）。

六月七日／**有一展搬出依頼への不信**／②－14

加納さんからＴＥＬ。有田氏から明日の有一展の搬出依頼。彼女、皆に連絡。聞いて、それは筋が違う。海上のもうけ仕事でないか（註三十四）。純粋なら入場料を無料にすべき。しかも、搬出の手が足らぬなら、海上が探すべき。そして、最後まで墨人会にしがみついていた有一故、墨人の連中に依頼すべきが筋。（一匹狼の看板と、実態との違い有）…と、有田氏に苦言を夜ＴＥＬする。

（註三十四）　加納菊女、有田光甫、海上雅臣。

【解】　同年九月発行の『山階通信』に「六月に西宮で催された絶筆展に行き、折りよく喜久江未亡人と娘さんがその日に神奈川の方から出かけて来ていて久しぶりに会えたのは、井上有一の作品と出会うことの感懐と共に一入のよろこびであった。」と記してあることから、前年六月十五日に亡くなった有一の西宮での一周忌展の搬出と考えられる。

六月二十一日／『山階通信』七月発行号原稿執筆／②-14

「出雲崎と江戸の学者たち」おおよそ終了。

【解】 翌々日二十三日「出雲崎と江戸の学者たち「完稿」」の記述、同手帳②-14に有り。同年『山階通信』七月号に掲載有り。

七月二十九日か三十日／虎斑の大蔵経／③-10

左市、江戸で勉学／由之が書く「禅師の君」のことばは、ザレ言、と小林氏（註三十五）言う。／「欄葛藤」の中で、何故、虎斑（ママ）（註三十六）」が、あれだけのスペースをさいて、維馨尼の事を記しているのか。これは例外、異様としか思えないが。／［小林氏答］維馨尼が江戸から金を沢山調達して帰ったからではないか。「江戸托鉢」と記されてはいるが、托鉢でなし、新多中、茂左エ門のところに行ったのではないか。／（弓＝二百云（ママ）両／云々、あり）／茂左エ門は、当時、寺侍であった。寺侍役、だが、それの役を見張る役だかで、葉ぶりがよかったのだ。茂左エ門のところに行くことを指示したのは、良寛か、或は虎斑か、そのどちらかであったろう。／木村家に一時、大蔵経が渡るようになって、それを良寛の口ききで難をのがれたことになっているが、実は、たぶん、そうではなくて、虎斑は確かにいくらかを木村家から借りただろうし、それが返せなかったのだろうが、意に介しなかった虎斑であったのだろうが、木村家は取り立てにヨウシャしない木村家であった。しかし何とか返したそれで良寛が、あの歌を（由之も）作ったのではないか。／やっぱり、良寛は、江戸に行っていたのではないか。

（註三十五） 小林繁雄、与板町歴史民俗資料館（現長岡市与板歴史民俗資料館）職員。

（註三十六） 「欄葛藤」は、虎斑和尚が文政元年（一八一八）年、伊勢松坂での大蔵経購入に往復した紀行文『請蔵南行爛葛藤』。大蔵経購入にあたっては、虎斑に付いていた維馨尼が江戸へ行って勧進し、それを心配した良寛が、文化十四年（一八一七）十二月二十五日（旧暦）付の手紙が残る。

【解】 『欄葛藤』については、既に同年二月発行の『山階通信』で触れられている。この時の旅程は、手帳②-14からも確認できる。七月二十七日「午后、上京」。同月二十八日「午前中、神田街。午后4時過、新井狼子個展行。」。同月二十九日「朝、上越新幹線で、長岡へ。午后から7時過ぎまで、与板資料館小林氏と雑談。」。同月三十日「新大合宿の田上へ。午后から開始。雑談一時間。」。八月一日「9時から12時迄批評会。やっと終った。玄関での見送り盛大、うれし。新津駅で白倉氏と落合い、津川行。」。同月二日「新潟市へ12時半着。（中略）佐久間書店外行く。」。同月三日「長岡市郷土史料館（悠久山公園内）での貞心尼展を見て、柏崎着。」。同月四日「2時半ので離柏。夜、7時50分、京都到着。」。また、七月三十日の新潟大学書道科錬成会での講演下書きも別に残る。

八月三日／由之と貞心尼の書／③-10

（長岡郷土史料館で由之と貞心尼の書を見て） 由之の筆蹟は良寛に似る、とても似る／（中略）／貞心扇面の張りまぜ中の貞心の歌「恋は学問を妨ぐといふ事を」があるが、この歌、なぜこんなに何回も書き残しているのか。

八月二十日／京都市美術館「今日の作家―森田子龍展」行／②-14

午后4時過ぎ、美術館、森田子龍展会場で、墨の酒井、太田、読売の菅原氏と会う。食事に一緒にとさそわれたが、森田相変らずの拒絶反応でふられました。三氏は、明日午后を約束する。

【解】 同手帳②-14の同日の見開き欄外に、「森田の断り方（○それは、どうでもよいのだが。／○何時も行く処が駄目で、ムニャムニャ／○自動車が4人で一杯なものだから、ムニャムニャ）。」の記述有り。森田子龍展とは、八月一日―二十四日、京都市美術館「今日の作家―森田子龍展」。昭和二十四年（一九四九）から同六十一年（一九八六）までの三十四点が展示された。同年『山階通信』九月号に同展を見た草玄の感想と、それ以前の六月に見た有一の絶筆展の感想が記されている。

八月二十八日／《無漏》の制作／②-14

午后小山行。「無漏」持帰り。

【解】 同月二十四日「午后小山行。紙の整理。（中略）カミ屑の箱の上に、蛇のカラ有。びっくり。こわごわ、下に運び出す。」、同月二十五日―二十七日いずれも「午后小山行。」。本記述翌日二十九日「午后小山行。カミ屑もやす」、同月三十日「午后小山行。」の記述、同手帳②-14に有り。昭和六十三年（一九八八）二月二十六日―三月二日に新宿、京王百貨店で開催された「ことばの姿・江口草玄の書」に《無漏》（白寿p187、S62-2-6）が出品されているが、この出品作か、前段階の作かは不明。

九月六日／『山階通信』九月発行号発送／②-14

山階通信九月号、発送。／午后、小山行。

【解】 同年九月一日「九月通信、ガリ版、原紙切り。」、五日「山階通信発送準備。」の記述、同手帳②-14に有り。

九月七日／《有漏》《有無》作品／②-14

午后小山行。書かず、「有漏」「有無」持ち帰り。（昨日書いた分）

【解】 《有漏》（白寿p187、S63-2-7）、《有無》（白寿p187、S63-2-11）が、前掲、同年八月二十八日の【解】同様、新宿、京王展に出品されているが、この出品作か、前段階の作かは不明。

十月十七日―二十二日の間／集団と（美術又は書の団体）運動／③-10

集団とは、（以下二つ並列で）運動の為のものか。／ピラミット的主人の為か。／前衛と、前衛運動。

十月二十四日／『山階通信』十一月発行号「牛尾山の無膠墨」原稿執筆／②-14

「牛尾山の無膠墨」の稿、完。

【解】「牛尾山の無膠墨」は、草玄の仕事場がある小山の先にある牛尾山法厳寺にあり、富岡鉄斎が《黒癖余筆帖》で使用していることを山本六郎から教えられたことなど、草玄が知らずにいたことへの思いが『山階通信』同年十一月発行号に記されている。同月三十一日「『山階通信』十一月分、印刷。」、同年十一月一日「午前、昨日印刷分をホッチキス止め。」の記述、同手帳②-14に有り。

十月二十五日／久しぶりの制作／②-14

午后小山行。久しぶりの筆ゆえ、乗りにくし。調子のいい中国ドーサ紙が、和紙の包み紙の中に入っている。何という紙で、何時頃入手か不明。

十一月十日／光悦の書状／②-14

午后、相国寺承天閣美術館行。光悦の書状が7、8点有。見鑒之有。光悦は手紙が格別よろし。

十一月十五日／《焉求》の制作／②-14

午后小山行。「焉求」の作、出来たか。／無膠墨採集（剋太氏の為）。反故もやし。

【解】《焉求》（白寿p188、S63-2-20）が、同年八月二十八日、九月七日の【解】同様、新宿、京王展に出品されているが、この出品作か、前段階の作かは不明。

十一月十六日／夫婦で陶芸／②-14

澄江と二人終日、陶芸。茶碗作り。【図9】

【解】草玄は、陶印だけでなく、陶器づくりも余技として手掛けた。この時の作ではないが、【図9】参照。

図9 草玄作陶芸、左「03-12艸」刻有り。中央、猪口「93-12艸」刻有り。右下、猪口入れ蓋「草（草書）」93年10月作の陶印の印影有り。左「艸」刻有り、制作年不明。

日付不明（十月二十三日―十二月十四日の間）／新井狼子の書論について／③-10

狼子は、書は、「芸術」を口にするようになってから堕落してきたと言う。が、文字を書きしるすということへの敬ケンさ、言葉は神であるという、絶対への畏敬がその根底にあった筈の書に於て、単なるヨーロッパ美学という、美ならざるものと美としてのものとの対比に於ける芸術観からする軽チョウ、フハク、によることを知らねばならないだろうと思われる。／言いかえたら、書は芸術以上の芸術を超えた芸術であるところのものなのであるという言い方をしてよかろうと思う。

【解】同年十月十二日「終日在宅。狼子への質問の手紙つくり。」の記述、手帳②-14に有り。これまでも新井狼子とは、書について意見を交わしてきた。その中で、昭和五十六年（一九八一）二月十四日に始まり、同年十一月十三日までの往復書簡は、『響』誌に「書―叩叩　新井狼子・江口草玄往復書簡」として、昭和五十七年（一九八二）八月号から同五十九年（一九八四）九月号まで、二十一回連載されている。本記述も、それに続くものとしての記述と考えられる。

日付不明（十月二十三日―十二月十四日の間）／書に於ける拙／③-10

今の［チンタイした］書家の書に新しい生命力を吹き込もう。為に拙を言うやよし、である。文字を書きしるす意志は、とりもなおさず、文字表現意志ともなる。「拙」にこそ書の根源が消されていないということを表相でとらえて、結果、投げやりに書けは（ママ）「拙」になる。原初に文字性はケイケンな祈りの対象であった。天の声であり、神のケイジであった。その文字を書きしるすに、こんな三文（百）代言になってしまってはいけないと思います。三百代言／三段論法／拙―投げやり／文字を単なる素材、道具にしてしまう、／◎「書とは、□（不明）の□□（不明）―」／まさにそ□（不明）通り、□（不明）義なしで、□□（不明）言う／「読□□（不明）直感（□（不明）――）／は問□（不明）□□（不明）いないのだが、しか□（不明）□□（不明）だからと、読むことを初めから放り出していたのでは、書を見る眼とは言いがたい。読むことを無責任に放り投げていたのでは、〝書〟を書く側としてもまた、きちんと書のことがつかまれていないということになる。

日付不明（十二月か）／書の形象は、言葉の形象喩／③-11挿み込み

「文学や書の形象は、言葉の形象喩である。…書を批評する、解読するとは、書の形象からそこに喩として書き込まれた言葉の位置にまで接近することである」

昭和六十二年（一九八七）

一月三日／山茶花の写生／②-15

年賀状の返事書き。一美が持ってきた山茶花の写生。

【解】草花の写生は、昭和六十年以降の写生帖が残る。（白寿、p115-117、ス1～19）参照。

一月二十日／『良寛』誌に「なごみの一人ごころ」投稿／②-15

「良寛」誌宛に「なごみの一人ごころ」の稿を投稿発送。

【解】同年一月十五日「終日コタツで「良寛開眼」原稿作り。」、同月十六日「午前中で「良寛開眼」完。」、同月十九日「「良寛開眼」を「良寛」誌に投稿の為、清書。」の記述、同手帳②-15に有り。

一月二十三日／『良寛』誌に「なごみの一人ごころ」改訂原稿発送／②-15

「なごみの一人ごころ」の改訂原稿を速達で新潟へ発送。

一月二十六日／『山階通信』一月二十六日発行号印刷／②-15

午后からガリ印刷（山階通信NO. 1）

【解】『山階通信』には、「なごみの一人ごころ―良寛開眼―」の稿、掲載有り。『山階通信』の番号は、その年の発行順で、平成二年（一九九〇）以降にならないと、通番を意味しない。

三月一日／『山階通信』四月二十日発行号原稿執筆／②-15

終日、炬燵で、「文人の書」の文と、「墨」3月号、顔真卿号を見、酒井さんに礼状を書く。

【解】「「文人の書」の文」は、七日に上京の折、訪問する埼玉県立近代美術館での「「文人の書」展（二月八日―三月二十三日）の草稿、下準備と思われる。『山階通信』同年四月二十日発行号に「雫まかせ（八）浦和での文人の書を見て」が掲載有り。

三月二日／制作準備／②-15

午后、小山行。ようやくドウサ液無くなる。手つめたし。

三月七日／書に於ける拙／③-11

昭和62／3／7／上京車中、「拙」に対することあげについて。上手でないという上手があるうさんくささ。拙巧、上手下手を超えたところの書の真実を視るのでなければなるまい、のに。

【解】同日「前、11時乗車、上京。雪。熱海辺からまた雪。つめたし。新宿京王デパート行。」、翌八日「埼玉近代美術館行。（中略）和光行。路花家。狼子と北海道の吉田功氏。」、九日「朝十時、新宿京王デパート佐藤氏と面晤。十一時、「墨」の酒井氏訪問。（中略）午后2時12分発で離京」の記述、手帳②-15に有り。後掲、同年三月九日までの記述参照。

三月八日／書を書くということ／③-11

62. 3. 8／私が書を書くということは、私が書を相対的に支配するのでなくて、私において書かれたその書が逆に、私の生き方を問うているのだ。（コペルニクス的発想の大切さ）

三月八日／須田剋太講演への疑問／③-11

3／8剋太講演／○［二つの矛盾の結合］／［（融合）、（激突）］／↔自、他の関係でもある。／（前々段から↓で）↓［古事記の、マゾユフスマのことというが、精神の物質との接触／＝［造形性］／物質／もの／ことば／文字／［存在実体］存在が実体化した時、存在になる。／☆「二つの矛盾の激突からは「融合」は出てこない」というが、融合の前には「激突」がなければ「融合」さえ出てこないのではないだろうか。でないと、「融合」が軽く、薄っぺらにならないか。／「生死が仏の命なり」―妥協ではない―というが、×「自他同時併存」というが、妥協の正当性を言っているのではないか。／［宇宙全体生命実体］／［差異存在実体］／違いがあるから尊い、／［道元、／正法眼蔵／華ゴン経、／荘子／剋太の根元／［体験と智識］―道元／「色即是空」の［即］には意味がある。体験し尽してはじめて「即」がある。／［造形性］／ゲンビ時代の墨人は中途半パであった。×書は抽象というが象徴性ではないか。／［マチエール］書家の□□（不明）の欠カン／［オブジエ］本来物がもっているままではならないか―になることは、本来もっているものから離れること。＝［？］／［書の本来もっているものとは、それではそれは何か。］／書道家がやらないことをやる。ならば平常、風、ということはどう評価するのか。／［あたり前に書け。］というが、よくわからない。／北魏の書の前に王羲之が出ている―ということは、羲之をだから認めるのか、北魏の先祖は羲之の書か。羲之の集字聖教序を賞めているが、その時に於ける「造形」とは何か。「呼吸しているが如きリズム」というが。下手とは＝精神の愛情があるということ。上手＝権力的／「芸術」

は「体験」である。／名言だな。／涙、はづかしさ、他を思いやる／［愛情］―もののあわれ、／善財童子を拝む／［即］字のこと／「体験」という大事な意味があるということ／□（不明）み／弱い／小さい／はかない／「人生は旅」だ／今の書壇とその中の書家は、問題にしていないのだが。

【解】 埼玉県立近代美術館「文人の書」展での須田剋太の講演会と思われる。手帳②－15三月八日「埼玉近代美術館行。」の記述はあるが、須田のことは記述無し。また、この雑記帳類③－11に挿み込んである「SCHEDULE1987」に、この記述と関連した日付不明記述有り。以下に記す。「うまい書がいい書とは限らない。うまい書はいい書であるべきはずなのだが、そこがむつかしどころで、そして又、面白いところではある。／しかし、下手な書必ずしもよいとは限らない。下手は上手くなくという、うさんくささがある。書が老熟をゆるすのはそれゆえ、（境涯と言わないこと）」 また、同挿み込みの別頁に、「下手と未熟、熟と生。上手＝技のク使（ママ）の巧みさのそれを放っておけば、えてして、部分的な筆技の空転につながりやすい。そのとき、下手という、上手と反対のものを持ち込むことで、いい気な浮き心から正心正メイ（ママ）の正気の方へと引きもどしてくれるという、ものであろう。」の記述も有り。

三月八日／現成何必／③－11

現成公案／［現成何必］＝存在実体、／生命がそこに現われたということ（現成何必を－で指して）否定がある、ということ。／「墨」編集部大門氏と、うなぎ屋「別所」で初対面す。岡本君も同席、狼子、光甫、等も。

【解】 同雑記帳類③－11に月日の記述がないが、翌日三月九日の記述前に記され、手帳②－15に三月八日「埼玉近代美術館行。晴。／や、暖かし。ウナギ屋行後（50人（ママ））、和光行。」とあることから、この日とした。

三月九日／上京時の面会／③－11

3／9／新宿京王百貨店、美術部佐藤優氏行。／（午前十時）あとで、燕行の時、相沢氏と会った上でという。／十一時、芸術新聞社酒井氏訪問。十二時十五分迫。文人展の事／九楊書論の事／（大門氏、酒井氏に叱られる。昨夜、江口と面晤していたことを言わなかったからと）。

日付不明（三月九日―五月十日の間）／**書の一回性／③－11**

気は機に通ず。一瞬の気である、一期一会、書の一回性

日付不明（三月九日―五月十日の間）／**書に於ける文字と言葉／③－11**

［喩＝作為／球心的／循環的／ラ線状転換＝必然］／言葉と文字は互いに反撥し牽引する。したがって書は文字を負い、言葉をかかえる。

【解】 前年最末尾に掲載の記述「日付不明（十二月か）／書の形象は、言葉の形象喩／③－11挿み込み」との関連が考えられる。

三月二十七日／蘇東坡臨書／②－15

午后、小山行。草取り。蘇東坡臨書。

四月一日／制作準備／②－15

読売新聞菅原氏から「現代の書流」のコピー来。午后小山行、つめたし。墨色検査。

【解】 「現代の書流」は菅原教夫、読売新聞文化部美術記者が読売新聞に同年一月から三月まで四十五回連載した記事。同年十二月四日書籍化して同社から発行有り。草玄の山内観の回想や、《たったひとり》（白寿p179、S50-P1）が取り上げられている。翌々日三日付の「現代の書流」を読んでの読後感の菅原宛手紙下書きが別に残る。

四月五日／黒谷和紙製紙見学／②－15

黒谷和紙行／8時出発（南海雄、佳容子）、黒谷行。大変手間のかかる製紙作業也。

【解】 黒谷和紙、京都府綾部市黒谷町の手漉き和紙。昭和五十八年（一九八三）京都府指定無形文化財に指定されている。

四月十九日／『山階通信』四月二十日発行号印刷／②－15

山階通信87、NO. 2印刷。封筒表書き。夜、後藤君からＴＥＬ有。山階通信が最近来ないので病気しているのではないか、と。

【解】 同月十三日「午后から山階通信今年NO. 2のガリ切り。」、同月十八日「午前、ガリ切、午后小山行。」の記述、同手帳②－15に有り。また、後藤君とは、後藤祐自、能面師。小学生から草玄に書を学び、「中学に入ったら来なくてよろしい」と言われるも、中、高校生時も、草玄に学び、以降も、頻繁に連絡をとっていた。『拙「ひびき」十九』参照。

五月八日／『１９８４　草玄仮名がきの書』割付／②－15

晴。午前「１９８４、草玄仮名がきの書」の割付作り。午后小山行。

【解】 『１９８４、草玄仮名がきの書』は、昭和五十九年（一九八四）八月開催の「草玄の書・南海雄の書」に

出品した作品と、案内状に記した文などをまとめた冊子。

五月十一日／『1984　草玄仮名がきの書』用作品撮影／②-15

「たぶれたる狐」「木の葉かくすべも知らで」の作、写真とり。「1984．草玄仮がきの書」の図録の為のもの。

【解】《たぶれたる狐たたずみ》（白寿p182、S55-F-4）、《木の葉かくすべも知らで年寄りぬ（一茶）》（同p183、S56-F-12）。同月十五日「午后、三和印刷行。「草玄仮名がきの書」冊子の件。」、同月二十二日「草玄仮名がきの書」割付し直しで、夕飯九時になってしまう。」の記述、同手帳②-15に有り。

五月十日―五月三十日の間／「成る」ということ／③-11

〝成る〟ということ。〝作る〟のでないところで、自ずと成るのだ。〝なる〟は、「実がなる」の「なる」でもある。実、つまり作物が実のり、なったのである。しかし、作ることなしに、〝なる〟は出てこない。作るという意志の後に、その意志さえ消えた（とけて）ところに立ってはじめて〝なる〟が手中に顔を出してきてくれるというものだ。

五月三十一日／臨書／②-15

午后、小山行。臨書のみ。

六月五日／『1984　草玄仮名がきの書』校正／②-15

午后、三和印刷で校正。6時帰る。

【解】同月八日「午后、三和へ校正行のこと」の記述、同手帳②-15に有り。

六月十九日／『1984　草玄仮名がきの書』納品／②-15

三和印刷から、「草玄仮名がきの書」250冊、出来上り。

【解】翌二十日「午前中、山科郵便行。「草玄仮名がきの書」発送。」の記述、同手帳②-15に有り。

七月三日／『山階通信』八月二十四日発行号良寛原稿完／②-15

良寛草稿「訥は魯の如し」、一応完。夜12時。

【解】「訥は魯の如し」は、『山階通信』同年八月二十四日発行号に掲載。

七月十三日／「北越名流遺芳」の人名索引作り／②-15

終日「北越名流遺芳」の人名索引作り。

【解】『北越名流遺芳』は、今泉鐸次郎編著で大正三年（一九一四）、四年（一九一五）、七年（一九一八）に和綴一輯、二輯、三輯として刊行された。その後、昭和五十二年（一九七七）に文献出版から三輯を合本して復刻された。目次を見ると、越後・佐渡の輩出した三百七十五人が、各輯無作為に掲載されており、草玄が、必要な人物の索引を作ろうとしたか、五十音順の索引を作ろうとしたかは不明。

日付不明（七月頃か）／墨人会における個と集の問題を振り返る／③-11

個の発想で集に抵抗して集団を作った墨人会は、自分が集になった時、そのことを忘れて、集の為に個は行為しなければならなくなっていく。しかし、まだ、この時は、個は個、集は集と、区別を出来ていたのだが、森田の意志が今思うと、そこが彼のおかしいところな（の）だが。集の中に個が、目をまわすことになる。

【解】個と集の問題は、草玄にとって生涯変わらず持ち続けた問題であった。その初めは、鈴木鳴鐸との出会いからであった。鳴鐸と草玄の関係は、拙論「江口草玄における初期書学期の鈴木鳴鐸『碧樹』・『蒼穹』の影響について」『新潟県立近代美術館　研究紀要』第十八号　令和二年（二〇二〇）（以下、『拙「鳴鐸」十八』と示す）参照。

日付不明（七月―十一月六日の間）／《風前一燈》草稿／③-11

《風前一灯》図10

【解】《風前一燈》の草稿は、作品（白寿p187、S63-2-14）と一致する。雑記帳類③-11から六月二十一日―十二月十日の間と考えられるが、手帳②-15の同年十一月六日「午后、作品を物部画仙堂に持参。二曲屏風を12月10日過ぎ迄と、無理に依頼する。」と記述あることから表記の間の記述と考える。

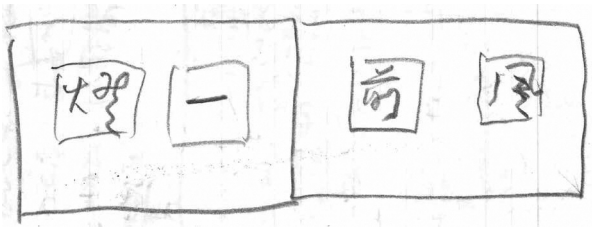

図10　《風前一燈（構想）》

八月一日／古書画鑑賞／②-15

午后4時集合で、古書画幅鑑賞。集る人、原田、池田、奥（ママ）の、石原、西俣、加納、阪田、南海雄、久幸、全部で10人。慈雲、竹田（註三十七）、よし。

（註三十七）　田能村竹田。

八月八日／《頭陀》制作／②-15

「頭陀」できたかな。

【解】《頭陀》は未見。写真アルバムに無し。

八月十五日／『山階通信』八月二十四日発行号ガリ版印刷ほか／②-15

午前、ガリ印刷完。／午后、小山行。／夜、『良寛』秋号の為のコメント、草稿。

【解】前々日八月十三日「午前、ガリ版完。午后、小山行。」、同月十六日「午前、ガリ印刷／午后、小山行。」の記述、同手帳②-15に有り。

八月十八日／良寛会へコメント発送／②-15

良寛会へ、良寛歌へのコメント、発送。

八月二十一日／『山階通信』八月二十四日発行号訂正と印刷／②-15

山階通信の終りのを訂正、ガリ切り、印刷する。終って小山行。

日付不明（八月―十一月九日の間）／**新宿京王展名検討／③-12**

ことばの世界―草玄の書―／ことばの世界・草玄の書／[ことばの世界　草玄の書]／書[ことばの世界・草玄の世界]／書・言葉の姿[草玄の世界]／書[ことばの姿・草玄の世界]／[書・ことばの姿　―江口草玄の世界―]／書の風骨―江口草玄の世界―／書・文字の風姿　―江口草玄の世界―／書の風骨・文字の姿[江口草玄の世界]／江口草玄[言葉の姿・書の世界]／書・言葉の姿[江口草玄の世界]

【解】翌、昭和六十三年（一九八八）二月二十六日―三月二日の「ことばの姿 江口草玄の書」（新宿、京王百貨店）の展覧会名の草案と思われる。昭和六十二年（一九八七）八月三日「午后出発上京。」、翌四日「10時過ぎ、新宿京王百貨店美術部行。相沢氏、佐藤氏と話す。会期来年2月下旬と決め、額ブチ店等行。」の記述、手帳②-15に有り。また、同年十一月九日「午前、図録の表紙書き。午後小山行、額準備。」、同月十三日「午后、図録用題字書き。」の記述、手帳②-15に有り、その以前と考える。後掲、同年十一月七日の記述参照。

日付不明（八月―十一月九日の間）／**良寛書の変遷／③-12**

清貧の書良寛といえども、「草庵雪夜作」（註三十八）[図11]にたどりつくまでの変遷をたどるのは興味深い。年次を追ってながめるとき、やはり、そこには一人の人間の書における在りようが見えて、楽しい。／がしかし、（以下記述無し）

（註三十八）良寛《草庵雪夜作》は文中に「七十有餘年」とあり、良寛入寂近くの書。臨終の遺偈のような意義を持つ書とされる。

九月六日／作品制作／②-15

午前、漢語作品を全部出して見る。15点以上ありそうなので午后小山行は、仮名書きにする。が、かけなし。困。

日付不明（九月中旬―十月下旬）／**須田剋太への思い／③-11**

○三十年来の交誼に免じて余技として、黙ってきた書家剋太への□[不明]□／百％は支持してないということ／チャイルド／アダルト／本人の心中／○当初　新鮮。二、三年して　頓挫（書がわかったとした時、わからなくなった筈）／今、造形（地ぬり）しているので持ち直した／①画家的な造形発想は従来の書家の発想範囲にないとの故、興味とそれなりの感動、有。↑［作る］＝工作すること―意識／［出来る］＝念々の念――心／②六朝の造像記↓［直線］裏面に／を、自分なりに造形している事の＝新鮮／（明清派の書家に比しての事）↑（（　）内を指して）外側のスタイルだけ。／然し③いまだ上等な書とは言いにくい。［ゆだんせず、あなどらず、書をみくびらず。］／［造形空間の生れ方の違い／・加えていってきらびやかにする。／・書かない。そこを、そのままで世界にする。］／（先の「裏面に」のこと）明清の書、悪からず、王鐸悪からず。悪くしたのは、偉い書家が明清朝を言い、良寛バリをやっているからだ。／直情、直線／カラッとする、気分がよい。／［直線―論理的、記号的］―今日の世相に合う／［曲線―情緒的、内省的／抒情的］／悔渋（ママ）

【解】「須田剋太展」（九月十五日―二十日、日本橋、三越本店六階画廊）開幕日、九月十五日「11時半乗車して上京。渋谷の彫刻を見て、三越の剋太展行。レセプション。盛大すぎて、あきれ顔。8時頃解散。」、十月十三日「剋太氏へ発信」、同月二十一日「剋太さんから元興寺講演速記の第三回目の推敲原稿来る。どう、どこが違うのだろ。」の記述、手帳②-15に有り。その頃の記述と考えられる。記述中、「悪くしたのは、偉い書家が明清調と言い、良寛バリをやっているからだ。」は、村上三島を指すと思われる。後掲、平成五年（一九九三）二月十三日の記述参照。

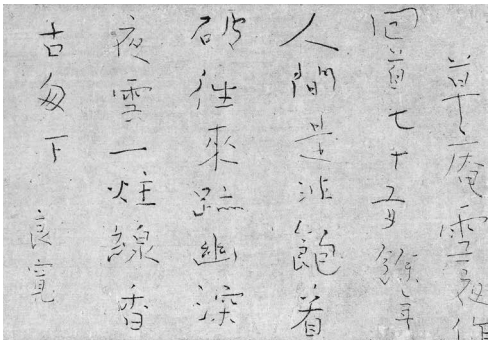

図11　良寛《草庵雪夜作》

十月九日／作品へ押印／②-15

小山へ、仮名作品を取りに行く。蜂の巣有、驚く。／午后、押印。

【解】 翌十日も「終日、押印。」の記述、同手帳②-15に有り。

十月十一日／作品総覧／②-15

南海雄、久幸たち全員集合、作品総覧する。

【解】 翌年、新宿、京王百貨店で開催の「ことばの姿 江口草玄の書」の為と思われる。翌十二日「作品写真とり。」の記述、同手帳②-15に有り。以降の撮影等作業もその為と思われる。

十月十六日／《磨瓦》撮影／②-15

「磨瓦」作品を撮映（ママ）。現像に出す。

【解】 《磨瓦》(白寿 p188、S63-2-29)。新宿、京王百貨店で開催の「ことばの姿 江口草玄の書」図録に確認できる。

十月二十六日／写真整理／②-15

作品写真帖三冊完。

【解】 前日二十五日、「作品写真をカットする。」の記述、同手帳②-15に有り。

十月二十八日か二十九日／「ことばの姿 江口草玄の書」のこと／③-13

○相沢氏へ図録を何冊？五部。／○文章返却の件／ことばの姿 江口草玄の書。二曲屏風は仕上りを写真に出す。ことばの姿 江口草玄書の世界。／雑俳

【解】 京王百貨店での「ことばの姿 江口草玄の書」は、相沢直人の仲介によって開催。開催にあたって、相談に乗ってほしい旨の手紙（同年七月三日付）下書きが残る。前掲、同年「日付不明（八月―十一月九日の間）／新宿京王展名検討／③-12」の【解】参照。

十月三十日／相沢直人と「ことばの姿 江口草玄の書」の相談／③-13

10／30雨。朝十時、燕、相沢直人氏と面晤。具体的にアドバイスを受け、昼食を馳走になり、画廊に寄り、燕三条午后三時三分の新幹線で、新潟市入り。駅前の新潟ベンクーガーホテルに入る。（三時半）／相沢氏との事／○二曲屏風の表は、黒はどうか。銀パク張りも。／○図録の表紙色は、黒で、白ヌキ、如何。／○「雫まかせ」は消して、「書譚抄」でよし。／○「序」を一番最後に入れ、二つ（「□（不明）順」と「不易」）を除くこと／○図録が出来たら五部送ること。／○価格は佐藤氏と相談のこと。（向こうが言い出すだろと）／○燕に美術館を作る予定で、その時には旧作品を寄贈のこと。

【解】 前日二十九日「朝8時20分雷鳥3号で出発、柏崎午后1時半着。」、翌三十日「853の柏崎発急行で燕行。相沢直人氏と面晤。」の記述、同手帳②-15に有り。また、文末にある相沢直人が計画した美術館は、燕市内に設立できず、寺泊町（現長岡市）に相澤美術館として平成元年（一九八九）開館した。しかし、後継者がいなく、平成十六年（二〇〇四）閉館し、そのコレクションは、当館が平成十七年度に受贈している。拙論「平成17年度寄贈「相沢コレクション」について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第七号 平成八年（二〇〇六）参照。

十月三十一日／草玄の會津八一観／③-13

曇天。や、寒し。九時半出発、会津八一記念館行。／なつめの実あまたもぎとり食いゆきて塩法坂をわれも越えゆく／八一の「豆柿をあまた求めて一つずつ食いもてゆきし滝坂の道」を習うてその昔、与板の塩法峠の古道をふみわけしときの事を思い出して記す。／八一の面白きもの、面会謝絶、寄稿謝絶、揮毫謝絶、右の如く相定め居り候也、と記せしもの。「やまはと」／もう一つ、書の言問の深さをつかんでいなかったのではなかったか。面白きものとは、八一が弟子に与えた歌をよむに必要なものとして手紙ふうに書いた冒頭の、感情の高揚がありし故也。他はおおむね、筆のたくみなし。／北方文化館（ママ）分館「おほてらのまろきはしらのつきかけをつちにふみつつものをこそおもへ」の半切、有。麻青（註三十九）句と比較のこと。／おほてらのまえほのはしらいしたたみ、かきろひもゆるはるはきにけり／八一の住んだところ。一階が当時、書斎兼応接室と。そこには八一作品有。二階は八一の寝室なりと。共に八畳位か。洋風。裏に広い庭、見ゆ。二階には良寛作品十点ほど。本家の二階に有願の書有。然し、良寛、有願共に博物館の本館に有ったもので、八一の所有しにはあらずと。／古美術屋に麻青の幅有。朱紙に「とはりたれてともしのもとにたたひとりいもがふみよむはるのゆきのよ、益平」とあり。八千円也をようやく七千五百円とす。入手する。

（註三十九） 式場麻青（明治十五年―昭和八年（一八八二―一九三三）、新潟県五泉市出身の歌人、書家、国文学者。良寛の研究者でもあり、会津八一、相馬御風、安田靫彦とも交流があった。

十月三十一日／八一記念館と鈴木翠龍展行／②-15

八一記念館と鈴木翠龍展行。佐久間書店。麻青の幅有。

【解】 鈴木翠龍展の会期、場所不明だが、本記述と同日発行の『翠龍・鈴木馨遺墨集』有り。その中に江川

蒼竹「翠龍先生の思い出」として「今度、子息の善幸さんが遺墨展を主宰される由、泉下の翠龍先生は大変喜ばれ、七回忌に当って最高の贈りものとなろう。」と記している。草玄は、昭和二十三年（一九四八）三月二十八日に三条市公会堂での今井嵐外主催の全国書展に、松蔭、蒼竹、翠龍らと参集しており、面識はあった。翌十一月一日「五泉市行。快晴。白倉丘氏宅行後、式場寿一氏宅行。／東京行。」の記述、同手帳②－15に有り。

日付不明（十月三十一日か）／**草玄の会津八一観**／③－11挿み込み

八一、ことばの音韻を形象転換しているから、もの足りないのだ。

【解】この記述の日付不明だが、雑記帳③－11挿み込みの「SCHDULE1987」に有り、昭和六十二年（一九八七）十月三十一日に會津八一記念館訪問が手帳②－15から確認できるため、その後と思われる。

十一月二日／作品の仕立て／③－13

屏風の装幀いっそ、金、パク／銀、黒はきつすぎぬか、枠は木なり。（茶）

【解】翌年の新宿、京王百貨店で開催した「ことばの姿 江口草玄の書」に出品した《風前一燈》（白寿p187、S63-2-14）の二曲屏風の縁の装幀のことと思われる。同日二日「午前、新宿京王行。」の記述、同手帳②－15に有り。

十一月三日／副島蒼海の書に脱帽／②－15

サントリ美術館の「人と筆蹟」展（註四十）行。／午后、洋協アトホールでの遊起山人（註四十一）展行。副島蒼海の鬼気の書に脱帽。

（註四十）「人と筆跡―明治・大正・昭和―」展、十一月三日―十二月二十日。

（註四十一）宮田遊起（明治二十四年―平成四年（一八九一―一九九二））、中国美術蒐集家、書家。政財界、文芸界と幅広く交友があった。

十一月三日／副島蒼海の書に脱帽／③－13

十一月三日、サントリ美術館行。「人と筆蹟」。／洋協アートホールでの遊起山人展行。サインに一つ、よいの有。他、筆クセだけが目に入る。九十七才にしてまだこの程度とは、人間もっといい筈なのに、筆には伝わらないのか、筆を扱うことにのみ腐心している人間の成長のなさなのか。／副島蒼海の書は、脱帽也。参った。髄を書いて、なお鬼気有。これが俺のめざすところの書だ。

【解】翌四日には、京都での記述が有るので、三日に帰洛したと思われる。

十一月六日／二曲屏風の表具依頼／②－15

午后、作品を物部画仙堂に持参。二曲屏風を12月10日過ぎ迄と、無理に依頼する。

【解】同年八月一日の前の「日付不明（七月―十一月六日の間）／《風前一燈》草稿／③－11」の【解】参照。また、同年十一月二日の【解】に同じ。

十一月七日／図録レイアウト／②－15

図録のレイアウトをしていて、午后出かける。

【解】新宿、京王百貨店で開催の「ことばの姿 江口草玄の書」図録【図12】。翌々日九日「午前、図録の表紙書き。午后小山行。額準備。」、同月十三日「午后、図録用題字書き。」、同月十六日「三和印刷行。図録の件、依頼。」の記述、同手帳②－15に有り。

十一月十四日／仮名作品整理／②－15

午后小山行。仮名作品の整理。寒し。

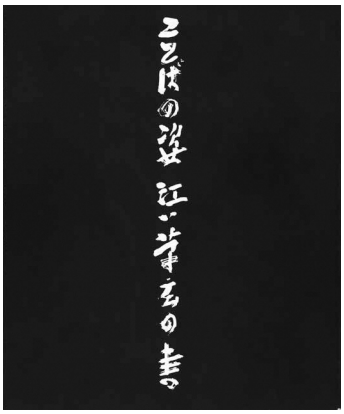

図12 《ことばの姿 江口草玄の書》図録表紙

図13 《辰》3.5×3.5㎝

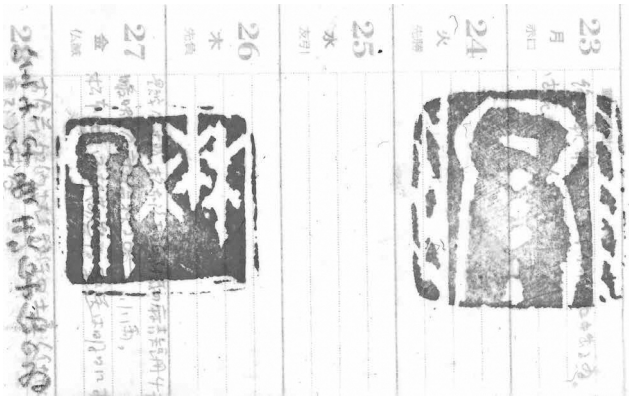

図14 右《泉》3.9×3.8㎝ 左《森泉》3.4×3.5㎝

十一月二十一日／表具作品の変更／②-15

物部画仙堂行。「滔天」と「聴雨」の交換。

【解】《滔天》は未見、写真アルバムに無し。《聴雨》（白寿 p188、S63-2-27）。

十一月三十日／刻印／②-15

快晴。終日刻印。[図13、14]

【解】十一月二十三日から二十九日の頁に[図13、14]が貼付してあり、これらを刻していたと思われる。後掲、翌年二月十三日の記述参照。

十二月七日／図録校正と表具仕立て決め／②-15

三和印刷に初校持参。／物部画仙堂行。屏風、張る位置決め。

【解】同月四日「三和印刷行、校正受領。」の記述、同手帳②-15に有り。

十二月十日／表具店へ屏風時参／②-15

物部画仙堂：二曲屏風（銀箔張り）持参。

【解】前掲、同年十一月六日に依頼していた《風前一燈》の表具が仕上り、納められたと思われる。前掲、同年十一月二日の記述で、縁をどうするか悩んでいたものが、「銀箔張り」になったことが分かる。その夜、「十二月十日（木）　夜、屏風写真とり」の記述、雑記帳類③-11に有り。

十二月十一日／図録校正／②-15

三和印刷に二校を取りに行く。堀川丸太町SS工房へフィルム届け。

【解】翌十二日「三和印刷行、二校届け。」の記述、同手帳②-15および、「十二日（土）午前、三和行」の記述、雑記帳類③-11に有り。

十二月十四日／額納品／②-15

午後、西山画房、額、全部出来上り、持参。

十二月十八日／図版校正／②-15

6時起床、三和印刷行。図録刷りを見る為。版、1/3やり直し、インクの色変え。帰宅夜9時。

日付不明（六十二年か）／**書と言葉／③-11挿み込み**

言葉との対応関係を持っているか、どうか／↑寒山詩の中の一文字でも、これが可能、だという。

日付不明（六十二年か）／**書における言葉と形／③-11挿み込み**

［逆接］／形が言葉におそいかかる、／形が言葉を同化してしまう。（意味なくしてしまう）捨るのでない。

昭和六十三年（一九八八）

一月十五日／『山階通信』四月発行号、良寛原稿完／②-16

「良寛と由之と敦賀屋直右エ門」完稿。

【解】同月六日「良寛の年譜、検討。」、同月七日「終日良寛関係の読書。」、同月八日―十一日いずれも「良寛草稿」の記述、同手帳②-16に有り。

日付不明（一月か）／**良寛出奔に思うこと／③-14**

何かもかも捨てた、が、遠くに行かないのは何故か。誰かに見つけてほしいという心が片隅に残っていた良寛。

【解】雑記帳類③-14は、表紙に「1988.1月」と記されており、その巻頭に記述され、一月三十一日の記述より前なので、一月中の記述と考えられる。また、『山階通信』№1（同年四月発行）「良寛と由之と敦賀屋直右衛門」の原稿中に「やはり彼良寛もまた父以南に似て体よく、家を捨てて出たのだったと思えてくるのである。」という記述もあることから、原稿に関連しての良寛出奔に思うことを記したものと思われる。

一月三十一日／須田剋太を囲む会／③-14

一月三十一日（日）、阪急夙川下車、「藤川」で「須田剋太を囲む会」を新春放談を兼ねて有田氏の書の美で主催、参加する。集まる者、秀島氏（註四十二）、村上翠邦氏（註四十三）、他十人程。／何てことなしで、少々不満なれど、然し剋太氏の場合はこれしかない、なかく集中しないから。／牛丸某（註四十四）、中国の拓本を持参、披露する。もう一つ牛丸某、肌が好かぬ也。／正午から、三時半頃迄。／最後に寄せ書きを、さらに剋太氏に蟻の絵を所望する人多く、色紙に盛んに描いて、さて、最後に、立って見ていた私の横を終って立って通る時、小声で、「ま、楽しく、やればいいんだ、

楽しくなるんだ」とつぶやいていた。所望でないのを、それを押さえてピエロ的にやっている自分に言い聞かすかのようにだ。／他の人から「江口先生も」と二、三回言われたが、「私はどうもパフォーマンス的なのは好みませんので」と断る。

（註四十二）　秀島踏破、大阪府立の高等学校芸術科書道教諭。昭和四十七年（一九七二）の個展開催時に須田剋太が来場し、以後知己を得る。

（註四十三）　村上翠邦ではなく、村上翠亭と思われる。

（註四十四）　牛丸好一と思われる。奎星会、宇野雪村弟子。

二月十三日／伊藤森泉陶印焼上り／②－15

貼付

「泉」「森泉」　1988．2．13．完成［図15］

二月十三日／伊藤森泉陶印焼上り／②－16

陶印焼上り。

【解】　手帳②－15および②－16の記述から、前年十一月三十日から手掛けてきた陶印［図13、14］がこの日（二月十三日）に焼上って完成したものと思われる［図15］。同手帳の左頁にも「八王子、伊藤森泉氏の為の陶印。」と記載した［図15］の二印の印影を縦に押印したものが貼付されている。

図15　右《泉》3.5×3.5cm　左《森泉》3.1×3.2cm

二月二十六日／京王展のため上京／②－16

朝出発、上京。京王展

【解】　同手帳②－16の三月二日まで「京王展」と記して線を引き、三月三日「東京10時発、午后1時40分京都着。」するまで「ことばの姿 江口草玄の書」のため、東京滞在していたことが手帳②－16に確認できる。

二月二十六日／相沢直人との面晤／③－13

88．2．26七時前起床、八時二分京都発のひかりに乗車。富士は雲の中で見えず。煙突の煙だけ白し。十時前。車中、新井狼子の「現代書の可能性」を読む。相変らず単発語のラ列で、説明不足。それよりか、書の場がもう一つ確実に把握されていないので、論旨アイマイ也。／相沢画廊通信の「李禹煥」展記事を読む（註四十五）。全く、燕市が、ただ一つ、良寛像（註四十六）を建てただけで、観光客の足を燕になどという発想は、児戯以下也。燕産業史料館を生かしてこそと言う相沢氏の説に大賛成。市が私説（相沢氏の）美術館建説にもっと本腰入れるべきなのにとは、こちらも、そう思う。／李氏の言う、「点を打つと、その紙が単なる紙から大きく広い海になる」ということ大賛成。書もまたそのこと也。／十一時十五分、新宿京王百貨店着。すでに相沢氏到着している。相沢氏から粟津杜子氏ショウ会される。◎作品集、を送る事約束せり。

（註四十五）　相沢画廊で二月二十一日―四月三日開催「李禹煥―FROMLINEノ世界」。相沢直人著『続 花なき薔薇』（夢譚書房　平成七年）に再掲。

（註四十六）　良寛像は、この年十月に燕三条駅燕口に建立される。茂木弘次《天上大風 良寛と子供》。

三月二日／「武玉川を書く理由」原稿依頼／③－13

菅原氏から、三枚で武玉川を書く理由を書けと宿題出さる。木綿のようにきめ細かな文章にと。これ、困り候。

【解】　『武玉川』は、江戸中期の慶紀逸編による高点付句集。草玄は昭和五十九年（一九八四）頃から、この『武玉川』の庶民性に惹かれ、以降、題材とした。後掲の同月または同月と推定される記述参照。

三月五日／作品返却、搬入／②－16

10時半、トナミ運輸・作品返送される。小山へ運んで、整理し、歩いて帰る。2時だった。／それから昼食。

【解】　新宿、京王百貨店での「ことばの姿 江口草玄の書」出品作品の小山の仕事場への収納。

三月八日／「良寛、清貧の書」原稿、『墨』編集部へ発送／②－16

金成氏宛、「良寛、清貧の書」原稿発送。

【解】　前々日六日「午前中、「良寛、清貧の書」清書。11枚。」の記述、同手帳②－16に有り。『墨』臨時増刊「楷書百科」（同年八月五日発行）に掲載。また、『山階通信』同年九月発行号にも掲載有り。

日付不明（三月上旬）**／武玉川を書く理由／③－14**

武玉川は対句なのだから、座における機知を競い合う、というものであったのだろう。江戸も特に中期以後は、わたしにとって親近感と興味であるのである。なぜならば、それは至って私的で微視的な事なのだが、越後の僧良寛が生きた時代であるからなのです。

【解】 同雑記帳類③－14の前掲、同年一月三十日の記述の後、三月十一日の柏崎行の前に記述されており、この間の前掲三月二日に菅原から依頼されていることから、同年四月十一日読売新聞掲載文に同様な文章はないが、草玄が武玉川を書く理由の原稿草案と考えられ、三月上旬とした。

日付不明（三月上旬）／**武玉川を書く理由**／③－14

七・七のリズム。おや、これは何だ。何と歯切れがよい。

【解】 前記述、日付不明（三月上旬）／武玉川を書く理由／③－14と同じ。

日付不明（三月十二日―二十日の間）／**武玉川を書く理由**／③－14

わたしの郷里は、越後の柏崎である。柏崎からほど遠くない出雲崎の良寛は、修業の備中玉島を去って越後に帰った。／わたしは、もっとも澄みきった空気の日の逢坂、あず／づ／ま路の山科で、「山科の夜」、僅少の酒を手にいささか遠く江戸の海を武玉川に眺めるとき、平素数倍の酔をよぶのである。／（さそう）／よどみの中に、はかなく住まねばならない今の世に、よどみも、はかなさも、俳諧のリズムに乗せきった江戸武玉川に心とられる。芭蕉からはとうていのぞけない江戸人の顔からだが眼の前に見えてくる、足音が聞こえてくる。この世に生きている人のありのままのリズム。

三月二十日／**「武玉川を書く」原稿執筆**／②－16

「武玉川を書く」の稿、出来。

【解】 前掲同年三月二日に読売新聞菅原教夫から依頼された宿題の原稿。同月二十二日「読売、菅原氏へ「書に、武玉川をかく」の稿、送る。」の記述、同手帳②－16に有り。四月十一日付『夕刊読売新聞』に掲載。

三月三十一日／**「黒と暗さ」原稿、有田光甫へ発送**／②－16

有田氏へ「黒と暗さ」の稿、発送。

【解】 同月二十六日「午前、有田氏用、原稿、大体完了。」、同月二十七日「午前、有田氏用、原稿、清書開始、「黒と暗さ」。／午后小山行。」、同月二十八日「午前中「黒と暗さ」清書、完了。晴。」の記述、同手帳②－16に有り。有田光甫『季刊書の美』第四十号　書の美研究会編（六月一日発行）に掲載。

四月十一日／**「「武玉川」を書く面白さ」掲載紙購入**／②－16

読売夕刊（11日付）10部購入。

四月二十三日／**『山階通信』四月発行号発送**／②－16

山階通信NO.1、発送。

【解】 前掲、同年一月十五日に完稿としていた原稿を、同年四月七日「良寛と由之と敦賀屋直右エ門」ガリ切リ。」、同月十日「ガリ印刷。」、同月二十二日「山階通信NO.1の封筒表書き。」の記述、同手帳②－16に有り。「山階通信NO.1」とあるが、前述のとおり昭和六十三年（一九八八）の第一号ということであり、連続する通番となるのは、平成二年（一九九〇）一月十四日発行号から。

四月二十三日／**《泉》印影**／②－16

〈泉〉「泉」　88.4.23　陶【図16】

四月二十四日／**副島蒼海の臨書**／②－16

午后小山行。久しぶり。副島蒼海の臨書そのままにしてあって10日ぶりか。臨書せず、草取り。

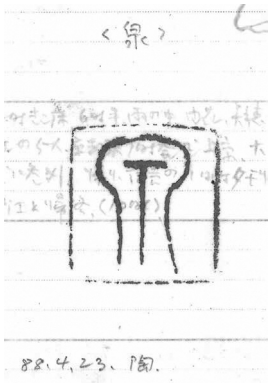

図16　《泉》2.7×2.5㎝

四月三十日／**『墨』掲載良寛原稿校正**／②－16

「楷書百科」良寛原稿、校正来る。

【解】 前掲、同年三月八日に発送した「良寛・清貧の書」『墨』臨時増刊「楷書百科」　芸術新聞社（八月五日発行）に掲載のもの。

五月三日／**墨人関係書類整理**／②－16

墨人関係書類整理／上田桑鳩手紙が出てきて、うれし。

【解】 翌々日五日「墨人関係書類整理。」の記述、同手帳②－16に有り。

五月九日／**鈴木鳴鐸手紙整理**／②－16

鈴木鳴鐸手紙整理。

【解】 鈴木鳴鐸（明治三十六年―昭和二十六年（一九〇三―一九五一））。草玄が戦後、書を学ぶために購読した『碧樹』（後に『蒼穹』と改題）の主宰者。鳴鐸の手紙が、複数確認できる。草玄が生涯持ち続けていた「個と集の問題」は、鳴鐸からの昭和二十六年（一九五一）三月二十六日消印の手紙に既に記されており、鳴鐸の考えに草玄は同調し、生涯持ち続けた問題意識である。『拙「鳴鐸」十八』参照。また、この手紙整理を始めとして、鳴鐸のことを回顧し、『山階通信』に、翌平成元年（一九八九）、四部作の形で延べ百五十八ページに亘り、綴っている。

五月十三日／《一機一瞬》の移動／②-16

小山行。「一機一瞬」を下から、中に入れる。「書道芸術」みんなバラバラにしてあって、残念。

【解】《一機一瞬》(白寿 p170、S41-10-1)は、六枚パネルの作品で、一枚のパネルが210×122.5㎝と大きく、小山の仕事場内では場所を占有するので、仕事場が山科音羽川岸の傾斜地にある高床であったことから作品を床下に置いており、それを仕事場内に入れたと推察される。

五月十四日／墨人会回顧座談会／②-16

午后4時から、集まる者、堀尾、森、郡(註四十七)、山本の四氏。墨人会の発足時の話。11時半、解散。

(註四十七) 郡定也、同志社大学教授。

【解】『白寿 江口草玄のすべて』図録に掲載した「墨人会回顧―現代書再考―」(二百五十五頁―二百五十九頁)はこの時の記録と思われる。

五月十五日／墨人誌の確認／②-16

小山へ墨人誌の欠号を見に行くが、有ったのは二冊だけ。

六月十日／狼涙忌展の賛助出品／②-16

JR芦屋下車、ギャラリー西宮(田村)へ、狼涙忌展の為の作品(白雲)持参。

【解】狼涙忌は、井上有一の命日(六月十五日)のこと。草玄が持参した作品は《白雲》(白寿 p187、S63-2-17)と思われる。

六月十二日／『山階通信』六月十七日発行号ガリ切り／②-16

「またしても良寛の像」のガリ切り。

【解】良寛生家のあった出雲崎町橘屋跡に建立された良寛堂(安田靫彦設計)を背に佐渡を望む形で柳澤清による良寛坐像が同年九月十六日に建立されることと、前掲、同年二月二十六日記述の燕三条駅に同年十月に建立される像について、「良寛としては迷惑であろう。良寛は決して、よろこぶまい。」と『山階通信』同年六月十七日号に記している。

六月十八日／継色紙の臨書／②-16

午后、小山行。例月集会の規程の継色紙、臨書。

六月二十七日／「漢詩と書」原稿執筆／②-16

墨別冊〈漢詩と書〉の為の原稿、大よそ完。

【解】同月二十五日「終日、〈墨〉別冊〈漢詩と書〉の草稿作り。」の記述、同手帳②-16に有り。『別冊墨』第九号「漢詩と書」芸術新聞社(同年十月五日発行)に「戴復古《江村晩眺》」のコメントが掲載。また、『山階通信』同年九月発行号にも掲載有り。

七月一日／《戴復古詩「江村晩眺」》制作／②-16

午后小山行して、漢詩を書くが、口ほどもなし、草玄は。(〝墨〟別冊の依頼による)

【解】同年六月二十五、二十七日のコメントに対する作品《戴復古詩「江村晩眺」》(白寿 p189、S63-10-1)の前段階。後掲、同年七月十日参照。

七月十日／漢詩作品制作／②-16

終日、家で、戴復古の詩を書く。腰痛く、出来ず、やっぱり、断ればよかった。

【解】翌十一日「終日、漢詩書き。完にしておく。」の記述、同手帳②-16に有り。前掲、同年六月二十七日、同年七月一日の記述参照。

七月二十七日／顔真卿楷書の臨書／②-16

終日、顔真卿、楷書臨書。

【解】翌二十八日「午前、顔真卿楷書臨書。」の記述、同手帳②-16に有り。

八月一日／陶に遊ぶ／②-16

陶に遊ぶ。

【解】昭和六十一年(一九八六)十一月十六日の記述および[図9]参照。

八月十三日／《天地》制作／②-16

午后小山行。久しぶり。「天地」の作ようやく出来たか。然し、この作にプラス蒼海のような鬼気が宿らねばいけないのだ。

【解】《天地》は未見、写真アルバムに無し。「蒼海のような鬼気」は、日頃持ち続けていた思いであるが、前掲、前年十一月三日にサントリー美術館で副島蒼海の書を見て「副島蒼海の書は、脱帽也。参った。髄を書いて、なお鬼気有。これが俺のめざすところの書だ。」と改めて感じたことにもよろう。

八月二十四日／作品制作／②－16

小山行なれど、制作、駄目。どうしたいいのだ。少し書くの、休もう。

八月二十五日／『山階通信』NO．3九月発行号ガリ版切り／②－16

ガリ版切り。(「漢詩の書」と「良寛楷書の美」のを第3号にするべく。)

【解】 翌二十六日も同様で「〃」の記述、同手帳②－16に有り。また、同月三十一日「ガリ印刷。終日。完。」、九月三日「山階通信88年NO．3、発送。」の記述、同手帳②－16に有り。「漢詩の書」は、『別冊墨』第九号で依頼された、前掲の同年六月二十五日から七月十一日にかけて制作した《戴復古詩「江村晩眺」》(白寿p189、S63-10-1)を指し、『山階通信』NO．3に「漢詩が読めもしないくせに、だから口ほどにもなく書家とは言えない草玄の、漢詩書写顛末の記であります。」と、その顛末を記している。また、「良寛楷書の美」は、それ以前、同年三月八日に送付した『墨　臨時増刊　楷書百科』に寄稿した「良寛清貧の書」の再掲を指す。

九月十七日／作品発送／②－16

夕方、日通ペリカン便で燕に作品発送。／(欄外に)燕、相沢氏へ、仮名作品7点、荷出し／9／17、日通。

九月二十三日／作品整理／②－16

午后、小山行。集まりの為の顔真卿、裴将軍碑を持ち帰りの為。仮名書きの為の掃除機かけ。

十月九日／良寛展でのこと／③－15

88．10．9．名古屋三越「良寛展」、木端集(写本)有。(良寛出家歌)うつせみは／女性宛の筆の伸び、「江戸ニテ」の維馨尼宛の↑心のほぐれなし。／精神の高よう／筆の高なり(上記二者まとめて)なし。／さびしさ、小ささ、自分の家で書くのと、外で書くのとの心の広がりの違い。良寛の小心の証明か。／小島正芳は、図録で「良寛のあたたかい思いやりが伝わってくる」とあるが、文的にはそうでも、書的には、全然無し。／由之との手紙、歌のやりとりの筆の見事さ。／頭にきたこと一つ、あり。会場を一巡して、もう一回逆廻りで見てきて「良寛由之私歌巻、ひさかたの」を見ていたら「横長の巻子仕立のそこでは私一人だけであった。」そのわたしを押しのけんばかりに右側にズータイのでかい男が来て、見ている私の丁度視点のところに、ぐいと手にした拡大レンズを置いて「こうして細かいところをよく見る…」とか何とか言いだすのだ。と同時に若い女性たちが五人か十人どっと寄って来るのだ。／なんや、こいつら、と少し腹にすえかえたが、おさえておさえて、大人げなしと腹さすって引きさがった。／良寛研究者という奴なんだろうが。が、とにかく、不愉快きわまりないことであった。／われ一人のわがもの顔、だから良寛研究家ていうのは、嫌いなんだ。

【解】 前々日七日から柏崎入りし、同月八日甥の結婚式、同月九日「朝、9:50で長岡へ。(中略)上越線で東京。昼食後名古屋へ。―良寛展―7:30帰宅」の記述、手帳②－16に有り。

十月十日／「鈴木鳴鐸氏のこと」原稿執筆／②－16

鳴鐸氏遺族へ返信。／「鈴木鳴鐸氏のこと」追稿。

【解】 同日付鈴木芳子(鳴鐸娘)宛、一度訪問して話を伺いたい等のことが記された手紙の下書きが残る。同月十四日「午后、「鈴木鳴鐸氏のこと」推稿。」、十五日「鈴木鳴鐸のこと」完。後記も。」の記述、同手帳②－16に有り。前掲同年五月九日の【解】参照。

十月二十四日／『山階通信』NO．4　十一月発行号発送準備／②－16

終日、山階通信NO．4「鈴木鳴鐸氏のこと」、ホッチキス止め、封筒書き。

【解】 翌二十五日「山階通信NO．4発送。出したあとが困る、することがないからだ。急キョ何かをさがさねばと思うが、何も無し。困った。」の記述、同手帳②－16に有り。

十月二十八日／「墨の世界展」準備／②－16

小山へ作品取り。(由花と)。西武大津店展の為。

【解】 翌年一月十三日―二月五日、大津、西武百貨店で開催の「墨の世界展」。草玄は《白雲》(白寿p187、S63-2-17)、《渺茫》(同p188、S63-2-31)、《石水投》(同p188、S63-2-22)、《覆水》(同p187、S63-2-13)の四点出品。

十月三十一日／仮名がきの制作／②－16

午后、久しぶりに小山行。仮名がき用の墨を作っておいたので、仮名がきすれど、寒し。仮名がきは今はもう時期でなし。

十一月四日／作品制作／②－16

晴、午后、小山行。駄目、紙が筆をはじいて受付けない。どうしたことだ。書けぬ、書けない。／燕の相沢氏から、美術館の設計図、来る。いよいよ着工と。

十一月七日／《濁世》制作／②-16

午后、小山行、「濁世」の作、出来たか。整理されすぎているか。

【解】《濁世》は未見、写真アルバムに無し。後掲、同月十八日の記述参照。

十一月十一日／上京／③-12

88. 11. 11［金］上京／「新橋の狸先生」p245（註四十八）／大雅の言「真を画けば風韻薄し」／人物を言うに、大よそ、パターン有か。／「風流瀟洒、磊々落々、直に神僊中の人也。詩を善くし、書之に次ぐ。画は即ち其の傍技値也。」／「画人彭百川、清貧寡慾、抜俗の韻あり。環堵蕭然、食或は給せず。而して性暢静処、以て憂と成さず。」

（註四十八）森銑三著『新橋の狸先生』と思われる。岩波文庫の増補版（平成十一年刊）で確認すると「真を画けば…」は大雅の言だが、「風流瀟洒…」は大雅の門下福原五岳の人となりを兼康愷『浪華詩話』の中で触れている部分であり、「画人彭百川…」は西山拙斎『間隠瑣言』に記された彭城百川のことと記されている。

十一月十一日か十二日／書雑感／③-12

◎孫過庭の「書譜」中のもの、千里のへだたり云々／形のこと／◎シャカクの画論／気韻生動、云々と現代美術の用語を取り込めば新しいとか。〝前衛〟であるとしている、ことのゴビヨウ。

【解】前掲、同年十一月十一日と後掲、同月十二日の間に書かれているので、この日とした。「孫過庭「書譜」中のもの、千里のへだたり云々」は、『書譜』中の「差之一豪失之千里（これを一豪に差へば、これを千里失なふ。）」を指す。翌年平成元年（一九八九）五月発行の『山階通信　鈴木鳴鐸語録（二）――書話――鐸子風調』に鳴鐸の日中の書の古典や用筆法、書と絵画との比較論等を抜き書きし、その最後に「書譚抄　わたくしは、いわゆる前衛もなく新も古もなく、ただただ〝書〟を思っています。」と短文を添えていることに関係しているか。

十一月十二日／鈴木鳴鐸娘訪問／③-12

11／12午后、一時、鈴木芳子氏宅訪問。／誠良院鳴鐸修道居士／26. 11. 28　48才　6ヶ月／温良院静香妙貞大姉／63. 6. 5.　84才

【解】前掲、前日上京したのは鈴木鳴鐸調査に向かうためということが確認できる。

日付不明（六十三年十月九日―翌年九月の間）／③-15

感性と悟性に加えて、われ〳〵は（書を書く）筆を持つのである。さらに加えて筆を持つことをしてはじめて、われに書ありということになる。

十一月十三日／第二十回日展感想／③-12

［日展］／藍は書き出し五字調子よし。書くのに忙しくて、空間を深くさせていない。□（不明）技というべし。／杉雨、左の細字、全く不可。大字二字も、無内容、中身無し。書のもつ深淵、雄大の一つもなし。／三島、やはり場中、清澄の作とすべきか。「有情」のことは不明。でも存在感ないな。「者」字、二字有、二字共、同じ衣装。これはおかし。作る姿体でなしに、前からの筆勢による姿が出てくるはず。／文部大臣賞の栗原…、浅い〳〵。／今井陵雪の「養魚種竹」、空気なし。／山内観、三行目の「□□」（註四十九）は、まだ〳〵。／線における呼吸の短かいのは、日展全部だが、これも同様。最後の「水」字、やっと書いている。筆の動き、観念の古さ。溶（？）けない心

（註四十九）作品から「□□」は、「臨遠」を指す。

【解】第二十回日展、十一月二日―二十四日　東京都美術館。文中「藍」は　殿村藍田《石蒼舒醉墨堂》、書き出し五字は「人生識字憂」。「杉雨」は青山杉雨《鑄字》。「三島」は村上三島《平生所為》。「栗原」は栗原蘆水《郷里の歌》。「山内観」は山内観《野楓》。同雑記帳類③-12に「11／13（日）池袋西武美術館前で、狼子、路花と待合い。雑談数刻。「カッパ画集」五冊頂戴「むげん展」写真集も頂戴。快晴、温暖、上野の日展へ。人の波。これだけ人間が動くことの不思議也。」の記述も有り。また、手帳②-16にも同様な、前々日十一日「10:45京都発。上京」、十二日「栃木鈴木氏（中略）三女、次女と関某氏。「蒼穹」有。」、十三日「狼子、路花氏と池袋で会う。雑談数時間。上野の日展行。（菅原氏の三島の線の件）」、十四日「（永青文庫）行」の記述有り。

十一月十四日／白隠展の感想／③-12

永青文庫行、白隠展（註五十）、一円相に感動有。他、橋を渡る図二幅またよし。（中略）午后二時四十四分発で、離京。

（註五十）「白隠禅師書画小品展」、同月十一日―十二月十六日。

十一月十八日／《濁世》制作／②-16

午后小山行。先週書いておいた「濁世」、もっとよかったと思っていたのに、全然駄目。がっかり。

【解】同年十一月七日の【解】に同じ。

日付不明（十一月十四日以降、十一月中か）／**良寛と白隠、米山、慈雲との比較**／③－12

良寛は、人間の深い寂しさを身いっぱいに思いつづけていた人であろうと思う。ここが、白隠、米山、慈雲の剛健なものとの根本的に違うところであると言えるだろう。だから、それらに相い対させようとしても、それは無意味とするしかない。足らないという一言で片づけてはならないと思うのだ。書きしるす文字に対するに誠実さを欠いてはもはや書以前の、スタートのところで間違っていると思うのだ。

日付不明（十一月二十八日頃か）／**『山階通信』平成元年三月発行号草案**／③－12

今から三十八年前の昭和二十六年十一月二十八日、鈴木鳴鐸は茨城県―に四十八歳の生涯をとじる。／私と鈴木鳴鐸とのかかわりは、鳴鐸晩年の数年です。くわしく記せば鈴木鳴鐸が出していた「蒼穹」誌に私の名が掲るのは昭和二十三年〇月号（ママ）です。それから鳴鐸死去までということになる。／（※までつぶしてある）越後の片田舎に住んでいて、よいものにうえていた私に手答（ママ）えあるものを与えてくれた書道誌として、※／ほとんど人々の注意をひくことなく、四十年ほどが過ぎたのである。彼の考える衆への嫌悪と書への情熱は、きわめて個性的な自分の言い方でつらぬかれていると言ってよかろう。

【解】『山階通信』の翌平成元年（一九八九）三月発行号から四回に亘って記述する鳴鐸に対する草案と思われる。前掲同年五月九日の【解】参照。

十二月十五日／**原稿発送**／②－16

〝墨〟へ、600字コメント「豪気百錬」を投函。

【解】同月十日「〝墨〟別冊で鉄斎を特集し、400～600字でコメントを書けと。」の記述、同手帳②－16に有り。「豪気百錬」『別冊墨』第十号「富岡鉄斎　人と書」掲載分。

十二月十六日／**作品集荷**／②－16

（西武大津展、作品集荷）P.M.1:30

【解】翌年の「墨の世界展」に出品のための集荷。後掲、翌年一月十三日の記述参照。

十二月二十四日／**印作り**／②－16

終日、賀状用の印、作り。はがきに印押し。未完。

十二月二十九日／**『蒼穹』巻頭言筆写**／②－16

午前、「蒼穹」巻頭言、筆写。

【解】翌三十日も同記述、同手帳②－16に有り。

十二月三十一日／**田能村竹田記事を読む**／②－16

午后、「宝雲」の竹田記事をコピーしてきて、読む。むつかしい漢語多し。これが読めることが当時の一般教養だったのか、比べてこの俺、全く駄目。

昭和六十四年／平成元年（一九八九）

一月四日／**田能村竹田記事を読む**／②－17

晴。「宝雲」の竹田文章を読了。いや、全く難文。然しこれが当時（昭和10年）の一般教養として読めたのに、と思うと、なさけなし。

【解】前年十二月三十一日記述と併せて、「宝雲」が何を指すのか不明。ただし、昭和十年（一九三五）五月二十五日発行『寶雲』（第十二冊）第三年第四冊に、笹川臨風「田能村竹田」の記事掲載が確認でき（国立国会図書館蔵）、このコピーを読んだのかもしれない。

一月五日／**『蒼穹』鳴鐸文筆写**／②－17

終日、鳴鐸文「蒼穹」写し。

【解】翌六日から八日にかけていずれも「終日、「蒼穹」筆写。」の記述、同手帳②－17に有り。前掲、前年五月九日記述参照。

一月十三日／**「墨の世界展」行**／②－17

郡氏と山科駅で待合せ、大津西武行。膳所で下車したら南海雄君も下車。同じ列車だった。「墨の世界」展（註五十一）。会った人、森田、辻、篠田、墨運堂、じゅらくの田井氏、海上、正源陶子氏。

（註五十一）一月十三日―二月五日、大津、西武百貨店。

【解】草玄は同展に《覆水》（白寿 p187、S63-2-13）、《白雲》（同 p187、S63-2-17）、《石水投》（同 p188、S63-2-22）、

《渺茫》(同 p188、S63-2-31)の四点出品。

一月二十九日／『蒼穹』鳴鐸文筆写／②-17

終日、鳴鐸語録「蒼穹」を筆写。

一月三十日／『蒼穹』鳴鐸文筆写／②-17

午前、鳴鐸語録筆写。午后、外出。文化博物館で、郡氏と会い、お茶と、林康夫展(日仏会館)行(註五十二)。／後、物部画仙堂行。奥野君の錦絵と、表具依頼の、大拙の書持参。／そこで、沢庵と一茶の掛物 ¥65,000〻で入手。うれし。／(沢庵の「喫茶去」¥35,000〻／一茶 ¥30,000〻)／(沢庵は、あぶなし、印が少し違うし、文字にユトリ少しが気になる。が、まあ、よろしとしておく。／一茶の幅は、コピーであらんか。／古い、今は亡い友人の形見と物部は言うが。

(註五十二)「林康夫陶芸展　一九四八年～一九八八年」(一月二十五日―二月四日、関西日仏会館日仏ギャラリー)。戦後、林も現代美術懇談会(ゲンビ)に参加しており、第一回展から第四回展に出品。そのころから面識があり、林も山科に住んでいたため頻繁ではないが、草玄が亡くなるまで交流があった。

二月三日／鳴鐸文筆写完／②-17

鈴木鳴鐸語録「碧樹風信帖」、「巻頭言」分、筆写完。

二月七日／「墨の世界展」作品返却／②-17

一美(の)ところと、久幸のところに、西武大津店から作品返却。

二月八日／「墨の世界展」作品返却／②-17

午前、西武、作品三点持っ(て)来る。

二月十日／鳴鐸「風信帖」のコメント執筆／②-17

午前、鳴鐸「風信帖」の為のコメント、作り。／午后、今岡徳夫個展(註五十三)行。

(註五十三)　会期不明、京都・広誠院での個展と思われる。

二月十一日／鳴鐸「書話」筆写／②-17

鳴鐸「書話」写し。

【解】　翌十二日にも「鳴鐸「書話」筆写。」の記述、同手帳②-17に有り。

二月十七日／木村重信退官記念会の誘いの断り／②-17

夕方、郡氏からTEL有。3月25日に阪大木村重信氏の退官記念会にさそわれしも、お断りする。榊莫山を発起人にしている、その変な対社会の姿勢が気に入らぬから。

二月十八日／ガリ切り／②-17

終日、ガリ切り。

【解】　翌十九日にも同記述、同手帳②-17に有り。

二月二十三日／「大きな井上有一展」／②-17

有一未亡人から、京都近代美(術)館での有一展の招待状5枚来る。(中略)タイトルが「大きな井上有一展」(註五十四)。少々変也。

(註五十四)　二月二十八日―三月二十六日開催、京都国立近代美術館。

三月三日／ガリ切りと副島蒼海の書の臨書／②-17

ガリ切り。／午后、小山行。5日の為の蒼海臨書取りに。

三月四日／ガリ切りと「しょうゆのみ」の制作／②-17

ガリ切り。久弥から依頼の「しょうゆのみ」の字、書き。

【解】　草玄の実家、柏崎の味噌麹屋は、長弟の久弥が継ぎ、その商品のため。後掲、同年三月二十四日の記述参照。

三月十日／『山階通信　鈴木鳴鐸　碧樹風信帖』の印刷／②-17

午后から印刷開始。何しろ25枚。前途りよう遠也。

【解】　『山階通信　鈴木鳴鐸　碧樹風信帖』は、表紙＋前書き(見返し―五頁)＋碧樹風信帖(鈴木鳴鐸身辺雑事)(五頁―四十八頁)のB4判二十五枚(二つ折り)に印刷されている。

三月十一日／『山階通信　鈴木鳴鐸　碧樹風信帖』の印刷／②-17

ガリ、印刷。

【解】　翌十二日にも同記述、同手帳②-17に有り。

三月十七日／『山階通信 鈴木鳴鐸 碧樹風信帖』の製本／②-17

ホッチキス止めで、一日かかる。

【解】 翌十八日「山階通信、発送準備。封筒、表書き。」の記述、同手帳②-17に有り。

三月二十日／『山階通信 鈴木鳴鐸 碧樹風信帖』の発送／②-17

山階通信発送。

三月二十四日／「しょうゆのみ」の送付／②-17

久弥へ、「しょうゆのみ」捺印の上、返送。

【解】 長弟の久弥が継いだ家業の味噌麹屋の商品票、未見。後掲、翌二年（一九九〇）四月六日の記述参照。

三月二十六日／鈴木鳴鐸「書法」筆写／②-17

終日、鈴木鳴鐸「書法」写す。

【解】 翌二十七日「終日、鳴鐸語録筆写。」、翌々日二十八日「同上筆写。」の記述、同手帳②-17に有り。「書法」は、前掲、同年三月二十日に発送した『山階通信　鈴木鳴鐸　碧樹風信帖』に続く『山階通信　鈴木鳴鐸語録㈡―書話―鐸子風調』のために鳴鐸の日本と中国の書の古典に対する考えを抜き出したことを指していると思われる。以降は、「書話」と表現しているものと同じものと思われる。

四月一日／《円空》制作／②-17

午后、小山行。「円空」。久しぶりに筆を持つ。

【解】 《円空》は未見。写真アルバムに無し。

四月三日／鈴木鳴鐸「書話」筆写／②-17

鈴木鳴鐸書話筆写完了。

四月五日／ガリ切りと《円空》制作／②-17

午前ガリ開始（鳴鐸、書話）／午后、小山行。「円空」ようやく自分の字らしくなってきた。出来たかとも思う。もう少し図太さ欲し。人の真似出来ぬ仕事をせねばならぬ。

四月七日／ガリ切り／②-17

午后小山行すれど、ボンド無しの為、墨調合出来ず、トンボ返り、ガリ切り。

【解】 翌八日「終日、ガリ切り。」、翌々日九日「晴。終日ガリ切り、筆作り。」、同月十日も、「終日ガリ切り。」[ママ]の記述、同手帳②-17に有り。

四月十一日／相澤美術館門標制作依頼／②-17

燕、相沢氏から、美術館の門標を書けと、来る。

【解】 前掲、前年二月二十六日に相沢氏に面晤した際、私設美術館建設構想が語られ、建設準備が進められ、当年、平成元年（一九八九）九月二十二日に旧寺泊町（現長岡市）に相澤美術館を開設する。その門標依頼。

四月二十一日／筆作りとガリ切り／②-17

筆作り、ガリ切りで、今日は終る。

【解】 前掲、同年四月五日から取り掛かったガリ切りは、同月十七日にも「ガリ切り」の記述、同手帳②-17に有り。

四月二十四日／筆作りとガリ切り／②-17

雨、終日、ガリ切り。／筆作りしていて、左腰、少々痛める。

【解】 同月二十八日には、「竹を切り、筆作り。」の記述、同手帳②-17に有り。竹は筆管の部分に使用か。

五月三日／ガリ切り完／②-17

鳴鐸書話のガリ切り完了。（60ページ）原紙で31枚になる。今度は印刷がまた大変なことだ。

【解】 『山階通信　鈴木鳴鐸語録㈡―書話―鐸子風調』は、表紙＋見返し、鈴木鳴鐸語録㈡―書話―（一頁―六十頁）のB4判三十一枚（二つ折り）に印刷されている。

五月五日／ガリ版校正と墨作り／②-17

午前中、ガリ版校正。／午后、小山行。／（中略）／墨にボンドを加えて、調子を見るだけで、帰る。

【解】 翌六日「印刷開始。8枚。」の記述、同手帳②-17に有り。

五月二十日／鈴木鳴鐸語録㈡製本／②-17

鈴木鳴鐸語録㈡、製本完。92冊。発送準備完。

五月二十二日／「鈴木鳴鐸第二集・書話」発送／②-17

山階通信、「鈴木鳴鐸第二集・書話」発送。

六月二日／鳴鐸コメント作り／②-17

午前、鳴鐸コメント作り。

六月五日／鳴鐸コメント作り／②-17

（五日から八日の欄をまたいで）北京での大事件、連日報道されるも（註五十五）、鳴鐸へのコメント作りで、こっちは、こっちでいそがし。

（註五十五）　六月四日、中国、天安門事件。

六月十六日／「鈴木鳴鐸に思う」原稿執筆／②-17

「鈴木鳴鐸に思う」の稿、もう一度、原稿紙（ママ）に書き直しして、完。一日中座りっぱなしで20枚、書き直し、これで完にする。

【解】『山階通信　鈴木鳴鐸に思う―「碧樹」・「蒼穹」における語録―』は、表紙＋本文（二頁―十五頁）＋子供の顔（子供の稽古の中での出来事を記したもの、十五、十六頁）、B4判八枚（二つ折り）を指すと思われるが、二十枚ではない。この後、推敲して頁数減となったか。前掲、同年六月二日、五日―八日の「鳴鐸コメント作り」は、この稿を指すと思われる。

六月十七日／「鈴木鳴鐸に思う」原稿執筆と「相澤美術館」題字書き／②-17

上記、稿、2枚コピー。／午后小山行。蜂退治、薬品撒（ママ）プ、これで終り。「相沢美術館」のタイトル書き図17。

【解】　前掲、同年四月十一日に依頼された相澤美術館の門標書きと同じものと思われるが不明。相澤美術館玄関入口に掲げられていた木に墨で書かれた門標は、相沢直人館長によるものと伺っており、草玄の手によるものは、美術館入口に至るアプローチ前にあった「相澤美術館」の御影石に刻まれたものの図17の原本を指すと思われる。

図17　相沢美術館門標

六月二十四日／崔氏玉座右銘の臨書／②-17

午后、小山行。月例会課題の座右銘（註五十六）を臨すれど、駄目。相沢美術館の題字、持ち帰り。

（註五十六）　空海筆、崔氏玉座右名。

七月一日／ガリ切りと制作／②-17

午前、ガリ切り、午后小山行すれど、右横神経痛の為、乗らない。

七月十日／相沢直人へ返信／②-17

午后、小山行。／燕相沢氏から館名のコピー来。訂正やら希望を書いて、明日返送予定。

七月十三日／後藤祐自への返信／②-17

雨、後藤君から一昨日速達来、泉美也子の件の返送と、心境ルルと書きしるし有り、共鳴。本日、右（↓以下の「　」内の記述を指す）の葉書返事を出す。少しカッコつけか。／↓「復、実益の社会と乖離して生きるそこを生き甲斐に生きていることを誇りとす、目の前が例え暗かろうが明るかろうが、己が生きるにかかわりなし。ただただ、わが手に持ちしわが手技に生きるのみ。以上。煙草止めるべし、7／13」

【解】「後藤君」は、後藤祐自、能面師。『拙「ひびき」十九』参照。小学生時から泉美也子と共に草玄主宰の「ひびきの会」で、書を学んだ。成人してからも交流が続いた。

七月十九日／相沢直人へ返送／②-17

昨日到着の相沢美術館名コピー、返送。

七月二十八日／慈雲書の感想／②-17

午后、思文閣美術館の慈雲展行。深々とした空間ということに於て、少々白隠に勝をゆずるか。

八月七日／鮫島看山の手紙探索／②-17

看山（註五十七）の手紙を探し出す。

（註五十七）　鮫島看山。戦前、昭和八年（一九三三）、上田桑鳩を中心に結成した「書道藝術社」の同人。論客として『書道藝術』創刊号（昭和八年十月発行）の「作書理法覚書」の中で「書は文字と云ふ素材を借りて作者の主観を表現するところの線の藝術である。」としたことが、その後の日本の書の展

開に影響を及ぼす一つとなる。

八月八日／鮫島看山の資料調査依頼／②－17

看山遺族、鮫島宗平氏へ発信。資料拝見願いの件。

【解】 恩師の一人である鈴木鳴鐸に続き、戦前、書道藝術社の一員であった鮫島看山が、戦後、書壇から離れた理由を調査するべく、遺族へ資料類が残されていないか、調査の打診を送る。その手紙の同日付、下書きが残る。次に記す。

鮫島宗平様　〒183東京都府中市（以下住所省略）／啓上／鮫島看山先生のことにつきましてお伺いを致したいと思い、このような手紙を差し上げますのですが、先ずは何といっても突然でまことに不躾な失礼をどうかお赦し頂きとう存じます。／　そこでまず私のことですが、私は、看山先生が和光大学に出講なさっておられた頃に大変多くの、そして格別なご指導を頂いておりました江口久幸の親でございます。そして、私は大正八年に新潟県は柏崎に生まれまして、書というものを終生の勉強対象としているのですが、先年亡くなられた和光大学の宮川寅雄先生には、宮川先生の師の会津（ママ）八一やら会津（ママ）先生が好まれた良寛やらの越後ということか、愚息共に、何となく親近感を頂いて、一方ならないご昵懇を頂いておりました者です。／　看山先生のお名前は、私の書の師匠が上田桑鳩でしたので戦前から、「書道芸術」という雑誌でよく知っておりましたけれども、一度も直接お話が出来ないままでしたが、看山先生が亡くなられる前年、昭和五十二年の冬に愚息と二人してそちらのお宅にお伺いしまして、初めて、いわば念願のご面晤を頂いたのでした。／　そのときに先生に質問申し上げたことがあるのですが、そしてこのたびのこの手紙を差し上げるのも、そのことの用件が主たるものであるのですが、それは、看山先生が敗戦を境にして戦後は全く書壇というものに見向きもなさらず、書壇への作品の発表もなさらずということへの私の、何故という疑問であります。なぜに戦後は書壇から離れ、書壇を見向きもなさらなかったのか、この理由が知りたいのであります。／　書壇に巣食う封建的な書家という小さな偏狭を超えてするところの看山先生の大きな芸術的世界観がそこにきっと内在していたはずだと思いますし、そしてその事は、昭和の書壇を語りつぐ為にも記録として残されるべきことだと思っているからです。「初めて、後にも前にも一回だけでした。ご面晤を頂いた時には、先生は雑談にまぎらわせて、それなら資料をとり揃えて次回にでもとおっしゃっておられたのに、その次回が、わたしの勝手で取りまぎれてのびくーになっているうちに、翌年の先生のご他界はまことに残念でありました。／　つきましては、お願いでありますが、先生の昭和二十年の日本敗戦を境にした前後数年の日記類や雑記類、その他メモなどの、書き残されたものが拝見出来ないでしょうか。書の関係者からの来信なども見せて頂ければと思いますが、このこと、いかがなものでありましょうか。ご連絡頂ければお伺い致しますので、是非々々どうか、日本の今日、そして今後の書の道の為にもよろしくお許しを頂きとう存じます。／　なお、戦中に宇都宮高等学校に教頭として看山先生がご勤務なさっておられた時に、やはり同校に居られて、比田井天来を師とする看山先生と同門であった鈴木鳴鐸という人がいました。戦後まもなく四十八歳という若さで夭折されましたが、やはり存在としての人物であったと私は思いまして、同封してご覧に入れますように、其の人の語録の記録を目下しつづけているのですが、看山先生につきましても、このようにそれはささやかなやり方ではありますが、しかし誰かがやらねばならない記録としての一つの形として残しておきたいと思うのです。／記録して後世に残されるべき看山先生のご業績だったと信じている私であります。何卒このお願いのこと、是非々々、よろしくお願いを申し上げます。／以上、唐突な手紙を差し上げる失礼をお赦し下さって、どうかよろしくお聞きとどけ頂きとう存じます。／１９８９．８．８．

八月十一日／制作と筆作り／②－17

また書けなくなった、筆が立たないのだ。筆のせいにして、筆作りする。

八月十二日／制作と筆作り／②－17

昨日作った筆、試したが、もう一つなので、また、夜、作る、二本。

八月十三日／ガリ切りと制作／②－17

難筆だが、使っているうちに、書けるか。／午前中、今日で「鈴木鳴鐸に思う」のガリ切リ完了。

八月十五日／印刷開始／②－17

謄写印刷開始。（今日は終日）

【解】 翌十六日「終日、印刷。」、翌々日十七日「終日印刷。」、同月十八日「午前印刷。」、そして同月十九日「終日印刷。全部完了。」の記述、同手帳②－17に有り。

八月二十日／作品制作／②－17

午后小山行。筆どうやら一番最初に作ったのが、やはり今は一番、手に合うようだ。

八月二十三日／作品制作／②－17

久しぶりに小山行。やはり最初作った→筆がよい。そして、散らしを無しに、普通に書いて、それで作品たり得るものがよし。「とほりのかさへあたるまめまき」の作、これでよし。

【解】《とほりのかさへあたるまめまき》は未見。作品アルバムに無し。

八月二十四日／作品制作／②-17

午后、早めに小山に行けども、だんだん線が神経質になってくる。困却、困却。

八月二十五日／鮫島看山資料調査再依頼／②-17

鮫島宗平氏に、鳴鐸コメントプリントを同封して、再度のお願い。

【解】八月八日に発信した調査依頼に宗平氏から返信がなかったためか再度依頼している。同日付、下書き残る。以下に記す。

啓上／再度お手紙を差し上げることの失礼をおゆるし頂きとう存じます。／先便にも申上げましたように、看山先生が何故に戦後の書壇に見向きもしなかったのかという私の疑問を解きたいためにいろ〳〵と身勝手なお願いをしたわけですが、何とかおゆるし頂いて、お聞きとどけを頂けぬでしょうか。／プライベートなものを拝見することへの失礼は重々承知してはおりますが、どうか、まげてお許しを頂きとう存じます。いかがなものでありましょうか。ご許可のご返事を頂けましてお伺い出来ますことを切に祈っている私であります。／なお、同封は鈴木鳴鐸先生への私のささやかなコメントです。ご覧下されば幸甚です。／以上、再々のことで失礼ご無理なこととは想いますが、お願いのことお聞きとどけ頂きとう存じます。／1989．8．25

また、この八月二十五日草玄送付の手紙と入れ違いに同日付手紙が鮫島宗平氏から送られ、草玄の期待に沿えず「手がかりになるようなものがみあたらないということで、私は今、お手紙を手にして大きな落胆のなかであります。」と記した八月三十日付手紙の下書きが残る。その手紙には、何とか調査の手がかりを見つけるため、作品や資料の実見希望に加え、弟子の連絡先を紹介希望する内容が記されている。

九月二日／『武玉川』の検討／②-17

大体終日、武玉川、セン（ママ）索。

九月十八日頃か／美術館の社会的使命／③-15

美術館の社会的使命とは、芸術文化とは、その貢献。いうならば芸術的感性の世界における知的精神の幸福にかかわる事柄である。

【解】同雑記帳類③-15の記述「1989．9月19日（火）京都11．55発、雷鳥21号。」の記述の前に本記述がされており、後掲、同年九月二十一日の相澤美術館竣工式での挨拶文案の後半に同様な記述が確認できるため、挨拶草案の一部と考えられる。

九月十八日頃か／鈴木鳴鐸調査計画／③-15挿み込み

鈴木芳子氏（中略）／○日記類の拝見（戦後及び闘病中の日記の有無）／○誕生地及転居のことも含めて、可能な限りくわしい履歴／（天来との交渉等）（右卿、桑鳩、鷗亭からの手紙）／○遺作品の拝見（遺作展をやられたというが、所蔵先はわかっているか）／○鳴鐸先生の写真一枚所望／・蔵書拝見―読書傾向／―分散／徳野大空／高畑素石

【解】同年九月十九日から二十三日までの簡単な旅程もB5判の用紙に記されており、同年九月二十三日に訪問する鈴木鳴鐸遺族への鳴鐸遺品の調査する内容の記述とみられる。後掲、同月二十三日記述参照。

九月十八日頃から二十日／相澤美術館開館での挨拶文案／③-15

地方文化、ツバメギ（ママ）ャーナルの一環として相沢画廊は十数年の間、企画展を開いて来たのでありますが、ここに更に目的を大きくして、新しく、相沢美術館として、寺泊という、このよき地にこれから活動を始めることになったわけであります。佐渡が島が見え、然もここは、良寛再（ママ）成の地であります。――郷本――この地に特色的な出来た建物は、その外観のみならず、内容に於て、これは日本に誇り得るべきものを持つ相沢コレクションであります。開館記念企画展の難波田先生の作品は当然としても、その内容のユニークさに於て、例えば、忠さんの作品です。――中村忠二――これら相沢コレクションは、相沢直人さんという人間の芸術美学によるものでありまして、誇るべき内容を持っているのでありますし、チクジ、それらは我々の前に姿をあらわしていくことでしょう。美術館の社会的使命とは、芸術文化への貢献にあると思うのでありますが、芸術文化とは、芸術的感性の世界における、さわやかな知的精神の幸福にかかわる事柄でもあります。相沢美術館はそのことに充分に答えてくれることを確信いたしました。／相沢美術館の誕生を祝します。

【解】同年九月二十一日の相澤美術館竣工式の挨拶文草稿。『ツバメジャーナル』は、相沢直人が発行した地方紙で、相沢画廊開設前、昭和四十八年（一九七三）まで市政批判を記してきた。相沢画廊、美術館については、拙論「平成17年度寄贈「相沢コレクション」について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第七号平成八年（二〇〇六）参照。同年九月十九日「1155発で柏崎行。（中略）久弥泊り。」、翌二十日「小島谷駅下車、木村家行。分水町下車、分水町良寛資料館行。」の記述、同手帳②-17に有り。「良寛再（ママ）成の地」とあるのは、良寛が備中玉島（倉敷市）の円通寺で修行の後、帰郷して住んだのが寺泊郷本とされていることから、「良寛再（ママ）成の地」と記したと思われる。

九月二十一日／相澤美術館竣工式／②-17

相沢美術館竣工式（寺泊）／朝、8:53寺泊行バス（分水駅前から）。終点から歩いていたら、相沢さんの車が通り、乗車、美術館行。／黒の美術館。祝賀会を藤田旅館↑（泊り）で盛大。↓終って、長﨑莫人、時事画報の村岡氏と相沢氏の4人で美術館行後、相沢氏の別荘へ行く。そこで又ビール。眺めよし。（中略）燕泊り。

九月二十二日／書における人間への興味／③-15

9／22／朝九時十分発の急行バスで長岡へ。／昨日の晴天、今日は雨、小雨の朝。／長岡駅で、荷物を宅急便に出す。長岡発11:01で上京。／昨夜、寺泊の宿で、時事画報社の村岡氏、長﨑莫人氏（註五十八）、そして相沢直人氏との四人で夕食中の長﨑氏の言に、世界の山歩きをしているのは黒部が知りたいからだ、と言う。黒部のような分からない――神秘性ということか――山は無いという。／たぶん底辺のところでは同じところに行くのかもしれないが、書は、自然界のこととは無関係のように思う。それは、一人の人間が或る風景に心うたれて詩を作り、それを書く、と、それが書なのだが、だからいって、書が外界の自然を写しているということではない。自然界のこのところに立ってわが心が息づいている、そのわが心が筆に乗って、書になる、というのだと思うし、そうだとしたら書は外界とは無関係なものなのだと言い放ってもよいのではなかろうか。／だから、書における私は、それは外界の自然には感動はするが、根源的なところでの興味は、「人間」そのものにある。或るその人の生き方、生涯の在りように興味をもつ、今の私であるのだが。昨日の竣工式祝宴のとき、京王の佐藤氏来り、有一の戦争日記展をやりたいという人がいるが、どうもあれは刺激が強すぎて、という。／海上からかと問うと、そうだということだ。有一のそれについてどうだと問うから、作品へのことは答をさけて、有一はかつての仲間であったのだと返事する。海上は私のことはあまりよく言わないでしょうと聞くと、いやそうでもなかったという。／京王展示室を大きくする予定だという。そうなったら、また私のも二回展を開く口ぶりであった。

（註五十八）　長﨑莫人は新潟県との県境近く黒部の山々が見渡せる地域の富山県朝日町出身の日本画家。相沢コレクションの核の一人。

【解】　同日「9:10バスで長岡へ。長岡発11:01で東京へ。」の記述、同手帳②-17に有り。

九月二十三日／鈴木鳴鐸遺族訪問／②-17

11:03羽鳥駅下車、関翠邸氏（註五十九）出迎えてくれる／作品等を拝見、手紙類借用、午后3時半辞去／8時過ぎ帰宅。／鈴木芳子氏宅行

（註五十九）　関翠邸、鈴木鳴鐸と同郷柿岡の書家。独立書人団。平成十二年（二〇〇〇）に鳴鐸が発行した『碧樹』と『蒼穹』を写版上下巻にまとめた。

【解】　前掲、「同年九月十八日頃か／鈴木鳴鐸調査計画／③-15挿し込み」の記述の内容のように、草玄は鈴木鳴鐸の遺族宅を訪れ調査を行ったことが確認できる。

十月十五日／鮫島看山資料調査／②-17

午前有楽町西武での中川一政展（註六十）見、府中の鮫島家訪問。希望したもの無く残念。

（註六十）　十月三日―二十四日、有楽町アートフォーラム。

【解】　前掲、同年八月二十五日の記述の【解】に記したように、八月三十日付送付後、鮫島宗平氏から手紙があり、九月十一日付で十月八日、十五日、二十二日（いずれも日曜日）の中から訪問日を尋ねる下書きが残る。それで十月十五日に鮫島家に調査に入ったと窺える。また、同手紙の下書きには、看山の弟子の連絡先が記されてあり、感謝の言が記されている。加えて「看山先生が最晩年に手島右卿と電話で口論というお話が先日便にありましたが、さもありなんという思いも致します。世俗の利権を追ったがゆえに世俗に一応、名をなした右卿という人物に看山先生は、きっとまじわらぬものがあった筈だと思うからです。ですからこの際どうしてもまとめて、記録として残しておきたいと思っている私です。昭和の新しい書の方向づけに大きな力であられた鮫島看山先生だからでもあるわけだからです。」と記していることから、草玄の看山に対する思いが伝わる。前日十四日「朝10時、久幸と上京。地震の為、1時間50分、新幹線遅れ。骨トウ屋行後、県人会館泊り。」の記述、同手帳②-17に有り、一泊二日での上京。

十月十六日／鮫島看山資料調査／②-17

鮫島氏から借りて来た本をコピーし、本を返送する。

十月二十日／鮫島看山調査と作品制作／②-17

午前、「書道芸術」誌中の看山関係記事転写。／午后、小山行。今日から老仄（ママ）紙に濃墨。

十月二十三日／鮫島看山調査と作品制作／②-17

夜、鮫島宗平氏よりTEL有。問合せ中の、看山生年月日の件、その時、書道ヂヤー（ママ）ナルという所から看山についての問合せ有と。

十月三十日／作品制作／②-17

〝墨〟への王羲之アンケート投函。／午后小山行。／（中略）／老仄（ママ）紙に少しニジミが欲しいので、昨日、表札書きの残り墨を入れて、ニジミが多すぎたので、調合加減したら、今度は全然ニジマズ、昨日の墨を入れても（ゼリー状になっていた）駄目。改めてすって入れてみたが、その墨が淡かったせいか、もう一つである。

【解】 翌年四月発行の『季刊 墨スペシャル第三号 王羲之』のためのアンケート。翌年の『山階通信』No. 1、一月十四日付にも掲載有り。「手習いを初めた当初の王羲之の書とは何ともつまらぬものよというわたしの第一体験であったそれが、反転することになる。『書道芸術』誌による開眼である。」と記述が有る。

十一月三日／作品制作／②-17

午后、小山行。にじみがうまい具合にいかない。にじみに気をとられてはいけないと気付く。

十一月四日／ペン習字と作品制作／②-17

午前、ペン習字手本書き、午后小山行。

十一月九日／鈴木鳴鐸と鮫島看山の調査／②-17

「鐸亭」が終って、次にと思った看山が、思う内容でないらしいので、気勢がそがれ、何となしに無為気分。空白時間の中にいる、無気力的な、やるせなさ。

十一月十一日／鮫島看山の調査依頼／②-17

鮫島看山氏関係の人への手紙文起稿、四人に発信。

【解】 前掲、同年十月十五日の鮫島家での調査では期待するものが残っておらず、そのため同日の【解】に記したように宗平氏から知らされた看山の弟子に手がかりを求めたものと思われる。送付先は、函館の河合松峰（清太郎）（日付不明、十月十五日の宗平氏訪問の記述ある手紙下書きに有り）、砂塚趙雲（十一月二十三日付、草玄の趙雲返信への礼状下書き有り）の二人は確認できる。他一人は伊藤神谷の名が前掲同年九月十一日付手紙下書きに有ることから送付したと思われる。残り一人は不明。

十一月二十日／年賀状用刻印と制作／②-17

年賀状用刻印。[図18]／午后、小山行。

十一月二十五日／作品制作／②-17

午后、小山行。あかん、駄目、何故だ。常識的に落ちこんでいる。

十一月二十七日／鮫島看山の調査／②-17

終日看山の文転記。

十二月二十三日／長弟へ《徳不孤》の発送荷造り／②-17

久弥へ送る（進上）「徳不孤」の作品、荷造り。明日発送予定。

【解】《徳不孤》は昭和五十五年（一九八〇）の作（白寿 p182、S55-F-9）。

十二月二十五日／朝日新聞新潟版掲載、横山蒼鳳「書一輪」への感想／②-17

相沢氏から「書一輪」記事についての手紙来る。／それへの返信を書く。とにかくあの横山氏の文は傲慢な書きぶりといってよい。

【解】 横山蒼鳳「書一輪」の連載の中で、同年十二月二日付朝日新聞に草玄の書いた相澤美術館の御影石に刻まれた門標の原本が取り上げられている。草玄が相沢へ送った同日付返信の下書きが残っている。次のとおり。

復／ 十二月二十一日付の書簡及び朝日新聞の新潟支局に出された十二月十八日付の抗議書簡のコピーを拝見いたしました。／ 御立腹のことよくわかりますし、また私のためにも代弁して下さったことは有りがたいことです。とにかく、十二月十一日付のお手紙と「書一輪」切り抜きを送ってもらった時の返事にも書きましたように、「書一輪」を一読して、よほど親密な間柄でもあのような文章の書きぶりはしないはずで、人と人との礼を失した、その傲慢な姿勢に私は心中驚いたことでした。／ 崔さんは、私と横山氏とはよほど昵懇だと思っていたと言っておりましたが、それもまた心外というところです。／ 先ず振り返ってみますと、何時だったか正確な期日は忘れましたが、竣工式後すぐだったでしょうか。横山氏から、百回記念に「相沢美術館」と書いた江口の文字を朝日新聞の「書一輪」に出したいから承知してもらいたい旨の来翰がありました。そしてその時に、術の文字か館の文字一字か或は相沢の二文字かにしたいと思うがというようなことが書いてありました。それに対して私は、「相沢美術館」の文字はすでに相沢直人氏のものなのだから私がもはやとやかく言えることでないので、直接相沢直人氏の方へ意向を確かめ、依頼すべきだとして、一文字二文字の字数のことはふれないまま返事を横山氏に出したはずです。／その時、文字数のことについても、そして横山氏から来たその旨を記してすぐさまそちらに私は手紙を書いたはずですし、相沢さんの意向が主となるべきですが、

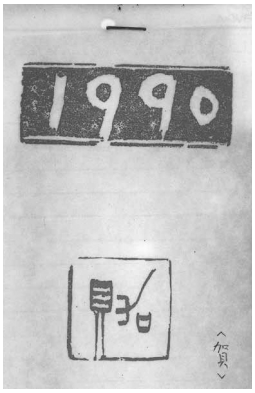

図18 《1990》1.9×5.0cm 《賀》2.4×2.4cm

一文字だけ切り離すのでは相沢美術館の名称の意味がなくなる、というようなことを書いた記憶があります。／　朝日の崔さんは私の横山氏宛の返事を横山氏から見せてもらったが、全く私の言う通りだったと言っていました。「書一輪」のこの問題に対する私の横山氏への発信は、それ一回だけです。／　横山氏は私からの了解を得たことを楯に取っているようですが、楯にしているそれは全く初めっから無いのだということです。／　ですから思いますのに、二文字か五文字かの問題は、二文字にする為の横山氏の私への了解など得てないわけですから、とどのつまりが、相沢さんが五文字でと申入れたことに対してのその意向を抹殺して、いわば勝手独断で横山氏が二文字に決めたのだということになります。しかもその上に、私が許諾にはかかわっていないにもかかわらず、江口の了解を得たので二文字にさせていただくというような、まことに無礼きわまりない手紙を相沢さんに差し上げること自体おかしなことであると言えます。ですから例えそちらへのその手紙が紛失で見当らなくても、横山氏の独断で事が進め〈ら〉れたということ、こちらの意向など何もおもんぱからずは明白というものでしょうと思います。／　結局、横山氏から私へは、その「書一輪」掲載のコピーの一枚も送って来ず、勿論、手紙一通有りませぬ。そちらに対して主張しているその主張の、つまり私からの証明取りが不可能だということを横山氏自身、本人が一番よく知っているからでしょう。／　以上、思うがままを書き記してきましたが、とにかく、私がなまじっか横山という人を知っており、その人もまた私を知っていたということで、相沢さんに今回のような大変不愉快な思いを何日も何日もさせましたことを申訳ないと思っております。どうかおゆるし下さい。／　以上。／　あと一週間たらずで越年です。くれぐれもご自愛の上、よきご迎春を。／江口久男／十二月二十五日夜／相沢直人様

日付不明／位牌案か／②－17

法音院 山階草玄大人【図19】

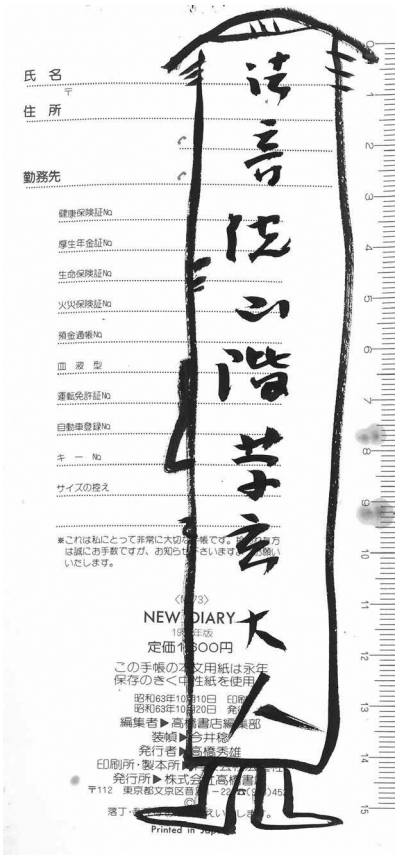

図19《法音院山階草玄大人》

【解】【図19】は手帳②－17裏表紙見返しに墨で記されている。草玄の人生の終焉への考え方は、後掲、平成三年（一九九一）四月十八日の記述参照。

平成二年（一九九〇）

一月六日／伊藤森泉への印荷造り／②－18

午前、細かな雨。伊藤森泉氏への刻印【図20】荷造る。／ようやく雑文思考になる。まず、新年に大拙の軸を掛けたことについて。

【解】手帳②－18の欄外に印影と「1／5　文日森泉」の記述有り。また、『山階通信』№1、同年一月十四日付に「鈴木大拙の軸、「無心於事」を掛けた。」として、その言葉から思う書のこと、その筆使い、わざについて「わざの取り込みがすぎやしなかったか。」と、自身の仕事について振り返っている。

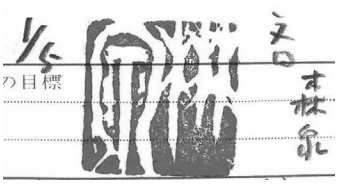

図20《森泉》2.0×2.0㎝

一月八日／ガリ切り／②－18

終日、ガリ切り。

【解】同月十三日「午后ガリ印刷。4枚完。」の記述、同手帳②－18に有り

一月二十日／『山階通信』№1発送／②－18

山階通信、投函。

【解】前掲、同月八日から記述のあるガリ切りは、『山階通信』のこと。一月十四日付のこの号を№1として、以降、通番が間違いなく振られる。

一月二十二日／石川九楊展の感想／②－18

午后、大丸での石川九楊展行（註六十一）。書固有の特質の、一貫して一回性と、伝達すべき文字のそれを捨てての可能性探究か。

（註六十一）　一月十九日―二十三日、京都大丸開催のものと思われる。

一月二十九日／筆作り／②－18

筆つくり。（松下さんから貰った太筆）

二月二日／筆作り／②-18

筆作り完。中、小、で6本出来。

二月九日／越後タイムスへ原稿送付／②-18

越後タイムスへ「川崎久一氏のこと」送る。

【解】『越後タイムス』同年二月十八日号に掲載。川崎久一は新潟日報記者を経て柏崎に永住した。その原稿中に、「『小林存伝――日本民俗学の先駆者――』の著者でもある川崎久一氏が柏崎の西本町三丁目に居られることを知って、ぜひ一度拝晤したいものと思いながらも、そして、一年に一回か二年に一回のたまさか帰省のときにも気にかけながらも、ついに果せないままに終った残念さが今も消えない。」と草玄の川崎をとおしての小林存への思いが綴られている。また、川崎は、『死んでも一枚の絵を描きたい　中村彝と洲崎義郎の軌跡』も著述しており、洲崎から譲られたであろう旧蔵の中村彝の書簡類二十点は平成二十八年（二〇一六）度、御子息から当館に寄贈された。拙論「新収蔵　中村彝、洲崎義郎宛書簡類について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第十六号　平成二十九年（二〇一七）発行、参照。

日付不明（元年十一月七日以降、二年三月上旬）／**會津八一の書／③-15**

格の違い（中国の書）／わたしも日本に生まれ、住むので、和雅とか、ジョ（ママ）情性が勝つが、だからというて同調していては、日本の書の格調を高められられない。だから同調するのでなく、かえって逆に反発するのかもしれないが、それは八一、われともにいまだ至らぬのであるといってよかろう。会津八一の書は、機会あるごとに見ているのだが、もう一つ。私の心の芯にまで届いてくれない。（それは何ゆえなのかを考えてみたい）

【解】手帳②-18に後掲、同年二月二十三日、二十四日の記述に會津八一の名があることから、この直前か、または後掲、同年三月四日の執筆に悩んでいるころの記述と考えられる。

日付不明（元年十一月七日以降、二年五月二十六日の間）／**雪村友梅の書／③-15**

［友梅雪村］（註六十二）、中国で□□（不明）すると／魂の深いところでガチッとかみ合う

（註六十二）　雪村友梅（正応三年―貞和二年（一二九〇―一三四六））、現長岡市出身。一山一寧に学び、晩年は京都建仁寺住職。五山文学の一人。

二月二十三日／會津八一の探究／②-18

終日、会津八一。

【解】翌二十四日にも同記述、同手帳②-18に有り。後掲、同年三月二十一日の『墨』掲載の原稿のためと思われる。

三月三日／會津八一の探究／②-18

会津八一について下調べ、一応、了。

三月四日／會津八一原稿執筆／②-18

八一の書についての書き出しが出てこない。苦吟中というところで、結局、無為な一日。

三月九日／會津八一原稿執筆／②-18

終日、八一の書へのコメント作り。夜、一応完。

三月十二日／會津八一原稿執筆／②-18

早朝起床、八一の書の稿、検討。

三月十六日／會津八一原稿執筆／②-18

晴、温暖。八一の書へのコメント、「我他彼此の言」清書。然し発送はまだ。

三月十七日／『武玉川』の制作／②-18

午后小山行。草取り。一寸武玉川を書く。

三月二十日／『墨』編集部への依頼／②-18

〝墨〟大門氏から原稿催促のTEL有。／「専門書家から見た八一の書」のテーマ中、〈専門〉の二字を削除するよう希望しておく。

三月二十一日／『墨』編集部への原稿発送／②-18

〝墨〟へ、「八一の書へのコメント」、〈我他彼此の言〉速達発送。

【解】「我他彼此の言」『墨スペシャル』第四号「会津八一」　芸術新聞社（同年七月五日発行）に掲載有り。『山階通信』№. 2、同年五月発行号にも掲載有り。

四月二日／ぐい呑み作り／②-18

快晴。／竹のグイ呑み、彫り。

四月六日／作品制作／②-18

午后、小山行。これまでの唐紙から、四尺単箋、鳥取竹箋等の白紙に書くが、勝手おかし、難渋す。／夜、久弥からＴＥＬ。看板の木、桜で、40万位と。[図21,22]

【解】 長弟からの電話は、実家の味噌麹屋の看板依頼。[図21]現在、店終いしているが、家屋がそのまま残り、看板は劣化しているがそのまま残っている。前掲、平成元年三月二十四日の【解】参照。店舗の看板や、暖簾などの設計図は雑記帳③-15に有り[図22]。長弟からのこの電話への返信として四月八日付で長弟に「先日の電話、早速に看板の材木探しを開始された様子。／そちらの目がねにかなった桜の木に負けぬよう、期待に添うよう頑張ってこちらも取りかかることにしましょう。／ なるべく、早く仕上げて送ろうと考えているので、とにかく、しばらくお待ちください。／以上。／ 鉢植えの春蘭の花が只今目を楽ませています。／ お二方、皆様、ご自愛を。／四月八日 久男／久弥様」と、草玄は書き送っている。また、看板の完成についても、本稿の三種の未公開資料中に記述は無いが、平成三年（一九九一）五月三十一日付の長弟からの看板完成の手紙に対しての同年六月四日付返信が残る。以下に記す。「復 看板完成のよろこびを伝える書信拝掌・こちらも同様に、心からのよろこび、うれしさです。／ 高い値段であるのに、それにもかまわず、とにかくと、よい板を見つけてもらったことについては、深い感謝です。／ 例えば緑青のことなど、いろ〳〵諸々、今思い出せば、たぶん楽しい苦労ということにはなっていることだろうとは思うけれども、しかし、完成までの間にいろ〳〵あった具体的な多くの苦労に対しても、改めて、感謝の念です。／ 文字がよろこんでいることだろうことを思うと、僕こそうれしくなってくる。／ なお、手紙の中に、掲額式の折は、何か、言いわけなしのことをするように書かれていたが、そんなことのないところが、いわばハラカラ、血縁というものでしょう。それこそいらざる考え、いらざる事などすると、かえって、心離れる、ハラカラ血縁でなくなるというものです。つまらぬ考えは即刻消した方がよろし。／ ところで、七月上洛の件、是非実現するよう、心待ちしています。／ 以上。お互い自愛こそ。／ 六月四日／ 久男／久弥様」。前掲二通の手紙、同年四月八日付手紙（原稿用紙一枚）および、翌三年六月四日付手紙（原稿用紙二枚）は、いずれも《江口麹屋看板のれん原本張り交ぜ屏風》（白寿 p190 H2-5C-1）の左扇下部に貼付されている。

図21 《江口麹屋》看板

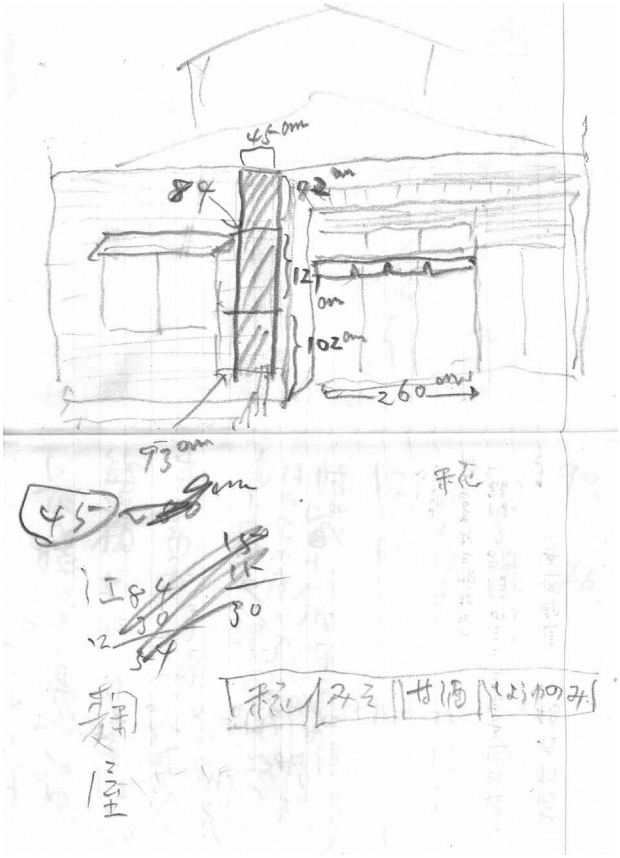

図22 実家店舗入口構想図

四月八日／原稿執筆／②-18

「〝胸中に〟（ママ）につい」をまとめる。

【解】 何の原稿か不明。

四月九日／看板制作／②-18

看板書き

【解】 前掲、同年四月六日に長弟から依頼された看板。同日【解】参照。同月十六日「午后、小山行、看板書き」の記述、手帳②-18に有り。

四月十三日／画仙紙購入／②-18

賛交社から、中国紙、蝉衣箋10反、雲母箋3反購入。計￥22万円。この用紙、5年前に@3万3千で買わされたのと同時のもの。立腹しきり也。

四月二十日／看板制作／②-18

午前、小山行、看板書き。／午后、4時、郡定也研究室行。直入(註六十三)の図録及、同朋社で写真版の件。

(註六十三) 田能村「直入の図録及、同朋社で写真版」が何を指すか不明。

四月二十日／看板作品発送／②-18

午后、久弥宛の看板発送。

【解】 前掲、同月九日の記述参照。

五月三日／ガリ切り完／②-18

ガリ切り、完。

【解】 翌四日「印刷終日。完。」の記述、同手帳②-18に有り。前掲、同年二月九日の「川崎久一のこと」および、同年三月二十一日の「〈我他彼此〉の言」他を掲載した『山階通信』No. 2(平成二年五月付)。

五月十一日／松本竣介展の感想／②-18

伊丹市立美術館行。(松本俊介展)(註六十四)／大作は粗、小品は所詮小品。大きな感動ではないが、「雑記帳」の俊介文に魅力がある所以か、その声の高きは。

(註六十四) 「松本竣介とその友人たち展」(四月二十一日-五月二十七日)。

五月十二日／山階通信No. 2宛名書き／②-18

午前、山階通信No. 2の封筒書き。

【解】 翌々日十四日に「山階通信NO. 2、発送。」の記述、同手帳②-18に有り。

五月十七日／《文曰坐忘》印影／②-18

文曰坐忘[図23]／5／17夜

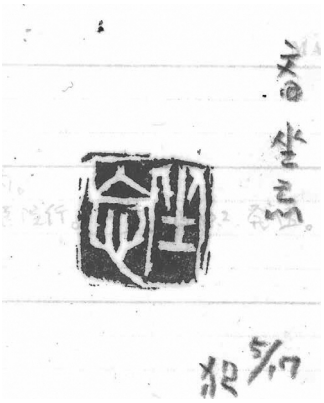

図23 《坐忘》2.0×2.0cm

日付不明(五月二十一日—六月三日か)／押印二顆／②-18

「山階小叟」、「草玄」「S60頃の作か」[図24]

【解】 五月二十一日から二十七日の頁に貼付してあるが、二十五日から二十七日まで上京、長岡、相澤美術館、金沢の記述が同手帳②-18に確認できるため、それ以前、または、同見開きの右頁、帰洛後の六月三日までの間かもしれない。

五月三十日／《直入》印影二種／②-18

「直入」、「直入」、1990. 5. 30[図25]

【解】 印泥の色を変えて、もう一枚貼付有り。

六月十五日／《菊》印稿／②-18

菊 6. 15[図26]

六月十五日／有一と完成度問題／②-18

今日は有一の六回忌。晩年、心のおかしさが出た事は残念に思う。ああいう

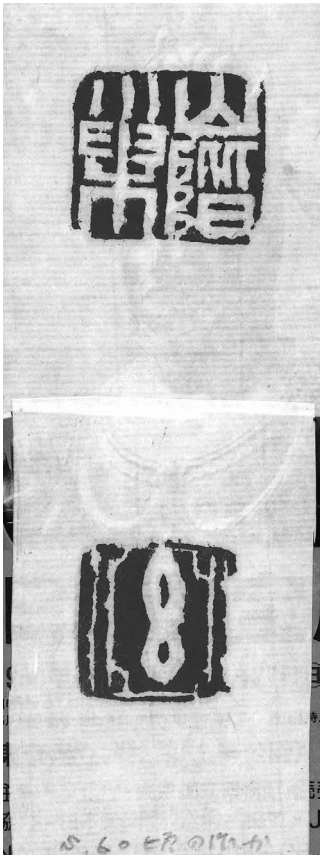

図24 《山階小叟》2.6×2.9cm 《草玄》2.4×2.4cm

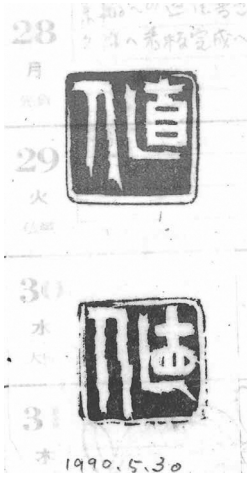

図25 《直入》二種 上2.1×2.1cm 下1.8×1.7cm

図26 《菊》印稿 1.9×1.8cm

心とは知らなかった。例えば、完成度の問題の時でも、こっちにけしかけといて、自分では、あと、知らん顔。俺と森田の二人だけのやりとりに終始した。他の同人も結局は駄目。森田が有一を嫌ったのは、有一が森田作品を批評した時、ハツケ見に見てもらったら、オシャレだというそれを書いたことに始まる。俺は完成度の問題からだ。嫌いになると事の如何を考えず嫌いに徹底するところが森田の欠点也。

【解】 拙論「江口草玄における書の〝完成度〟について――草玄・子龍の書の完成度論争」『新潟県立近代美術館研究紀要』第二十号　令和四年（二〇二二）発行　参照。

六月二十五日／《刀泉》印影／②－18

90. 6. 25　《刀泉》　刀泉［図27］

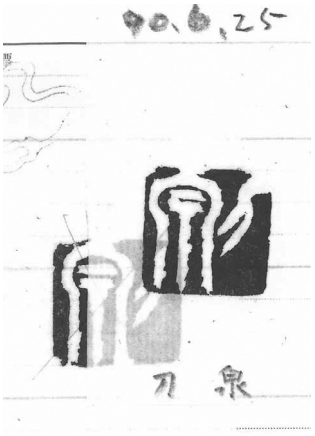

図27　《刀泉》2.0×2.0㎝

六月二十八日／相澤美術館展示の作品選定／②－18

朝、相沢氏と二人で小山行。旧作選別後、仮名作品選定。

【解】 翌二十九日「午后から小山行。旧作を荷造る。」の記述、同手帳②－18に有り。翌平成三年（一九九一）に展覧会を開催する予定だったようだが、相澤美術館での開催は、翌々年の平成四年（一九九二）三月五日―六月三十日（前期展）、七月二日―十月十三日（後期展）「ことばの姿―草玄の書」として開催される。

七月一日／ガリ印刷／②－18

ガリ印刷で一日終る。

七月六日／作品整理／②－18

午后小山行。旧作整理で終る。

【解】 翌七日「午前、相沢美術館行の仮名書き作品の写真とり。」の記述、同手帳②－18に有り。

七月十三日／相澤美術館展示の作品選定／②－18

相沢美術館企画展（1991年）用の作品控を作る。平仮名作品に印押し。

【解】 翌十四日「燕、相沢氏へ、企画展作品の名簿を送る。」の記述、同手帳②－18に有り。

七月十五日／須田剋太逝去／②－18

須田剋太氏逝去（昨日）。入院していた事は有田光甫氏から聞いていたのだが。哀悼。

七月二十日／郡定也に原稿依頼／②－18

午后4時、アサヒビヤホールで郡氏と待合せ面晤。来年の相沢美術館企画展文章の件、依頼。

【解】 「来年の相沢美術館企画展」と記しているが、次年度の年明けて平成四年（一九九二）の開催。前掲、同年六月二十八日【解】参照。同展図録に郡定也「草玄小考」掲載有り。

七月二十四日／陶器制作／②－18

土をひねる。グイ呑み。

【解】 長男久幸氏が陶芸をしていたので、それに合わせて陶器や、陶印の制作も草玄は行った。前掲、昭和六十一年（一九八六）十一月十六日の記述および［図9］参照。

七月二十八日／柏崎市ふるさとまつり絵あんどん制作／②－18

柏崎市アンドン展作品二点描く。「古物たち　棚の裏まで西日哉」、「だんだらの日覆いの下や宋胡録」。

【解】 故郷柏崎市商店街、本町ぴっから通りで開催されていた柏崎ふるさとまつりを飾る「絵あんどん展」にこの年から草玄も出品し、途中二年出品できなかったが、平成二十八年（二〇一六）まで協力した。《古物たち―》（白寿 p196、H2-8-方1）、《だんだらの―》（白寿 p196、H2-8-方2）参照。

七月三十日／原稿執筆と作品制作／②－18

午前、須田剋太哀悼文（有田氏の書の美用）／午后、小山行。漢語作品に取りかかる。

【解】 「須田剋太哀悼文（有田氏の書の美用）」とあるのは『書の美』第四十七号。『山階通信』No. 3にも掲載され、「拙文「須田剋太さんを懐う」は、そのために草しました。」と記している。「漢語作品」は何を指すか不明。

七月三十一日／作品制作／②－18

午后小山行。墨を濃くする。

八月一日／作品制作／②-18

午后小山行すれど途中で引返して、ことば選び。下保（ママ）の風景ことばでは、もう一つ駄目。

八月四日／作品制作／②-18

午前、茶碗作り。／午后、小山行。困却。出来申さず日。

八月六日／《虺々》制作／②-18

午后小山行。「虺々」を書けど、さっぱり。

【解】《虺々》は未見。写真アルバムに無し。同年ころに書いた《虺》（白寿p190、H2-F-3）は一連の作品か不明。

八月十三日／須田剋太原稿への磯部南海雄批評／②-18

南海雄君、午后来。剋太さん原稿へのコメントは有益。

八月十四日／須田剋太原稿清書／②-18

午前中、剋太原稿清書。

八月二十四日／ガリ版印刷／②-18

ガリ版印刷、終日。

【解】翌二十五日「午前でガリ版印刷完。」の記述、同手帳②-18に有り。

八月二十六日／《淇水》制作／②-18

午前、山階通信NO.3、ホッチキス止め。／午后小山行。材料作り。法厳寺無膠墨も少し混入。「淇水」出来たか。

【解】「法厳寺無膠墨」は、前掲、昭和六十一年（一九八六）十月二十四日の記述参照。《淇水》（白寿p190、H2-F-1）を指すか、その前段階か不明。

八月二十九日／山階通信No.3発送／②-18

山階通信NO.3、発送。／午后小山行、駄目、々々、々々。

九月十四日／良寛原稿執筆／②-18

終日、良寛草稿。進まず。

【解】翌十五日「雨。良寛草稿で終日。」。翌々日十六日「終日草稿。一応完。」の記述、同手帳②-18に有り。

九月二十四日／米山展、松山旅／②-18

朝、7:30松山着。県立美術館へ、米山展最終日にかけ込む。12時迫見、骨董屋ブラブラして、星ヶ丘温泉行。（中略）P.M9:00乗船。すごい込み方。

【解】「開館20周年記念 三輪田米山展」は、愛媛県立美術館で開催（九月一日―二十四日）。草玄たちは、前日二十三日「午后7時京都駅待合せ、南海雄、久幸の三人で元町下車、神戸乗船で、松山行。二等ザコ寝。ごった返しの、身をちぢめての船旅。」、翌二十五日「朝6:10神戸着。」の記述が同手帳②-18に有り、旅程が確認できる。

九月二十四日／米山の書に思うこと／③-16

米山展［1990／9／24］／松山／「かどまつやかたかたならずかたよらず」／「間が抜けた面白さ」、「気楽に書けということやなあ」。

九月二十七日／「良寛楷書、つつましく、つましく、富裕」原稿清書／②-18

「良寛楷書、つつましく、つましく、富裕」清書完了。

【解】「良寛の楷書について　つつましく、富裕」『墨スペシャル』第六号「良寛入門」芸術新聞社（平成三年（一九九一）一月五日発行）に掲載有り。『山階通信』No.4、同年十一月発行号にも掲載有り。

九月二十九日／良寛原稿、郡定也へ送付／②-18

良寛原稿発送。郡氏へ、良寛原稿コピー同封して発信。原稿5枚を10枚越えても可の件。

十月二十八日／有田光甫と雑話／②-18

◇有田光甫氏／晴／朝9.30出発、池田、逸翁美術館行。12時着、午后1時から、1時間5分雑話〈平安仮名に於ける二つの意味〉。

十一月三日／武玉川の制作／②-18

晴／午后小山行。武玉川書くも乗らず、紫式部取ってくる。

【解】「紫式部」は植物を指すと思われる。

十一月四日／ガリ切り／②-18

風邪気味、ガリ版切りはじめるが、駄目。

十一月十七日／山階通信№4発送／②-18

山階通信発送。／（中略）／午后、小山行。枠づくり。5時半迄。まっくら。

【解】 翌十八日「午后、小山行。枠作り。」、翌々日十九日「昼食持参で小山行。終日枠作り。ようやく完。」の記述、同手帳②-18に有り。

十一月二十六日／作品発送／②-18

午前中雨。待てと暮せど、集荷来ず、結局、まっくらくなった5時過ぎに来る。作品発送出来て安心。

【解】 後掲、同年十二月十七日の記述から、相澤美術館での展覧会のための第一陣の作品発送と思われる。

十二月一日／《吉羊》印作り／②-18

賀状用刻印。／「吉羊」90. 12. 1.【図28】

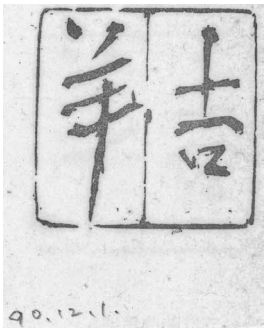

図28 《吉羊》4.1×4.1cm

十二月十日／作品を取りに小山へ／②-18

夕方、小山に作品を取りに行く。

十二月十七日／相沢直人からの連絡／②-18

夜、燕、相沢氏からTEL。作品、受けとったと。

十二月二十五日／作品制作／②-18

制作。

平成三年（一九九一）

一月十二日／相澤美術館企画展作品選別／②-19

相沢美術館企画展の作品選別。／（武玉川の仮名書き、21点、漢字6点）

【解】 翌年の企画展では、前期（漢字ことば）三十一点、後期（仮名ことば）三十九点（全点「武玉川」）が展示された。

一月十三日／日比野五鳳追悼文執筆／②-19

午前、日比野五鳳追悼文、一応完。／（中略）／源氏物語中の「はなち書き」確認。

【解】 日比野五鳳は、昭和六十年（一九八五）一月二十七日に没している。後掲、同年一月十九日にあるように『墨』の特集のための原稿と考えられる。同年二月発行の『山階通信』№5にその原稿の記述が有る。「『墨』三月号で、「日比野五鳳――その人と芸術」を特集するについて、六百字でコメントせよという。／ ご本人には一面識もない。気さくで権威ぶらない人であったというが、ではあの水穂会という大きな集団は、何を意味するのか。自分を慕う人たちの自らなる集団と言うか。ならば序列と権威づけの弊に目をつぶるは何故か。統率者的親方の座にあったということは何なのだ。と言ってみたくなる。／ いわゆる書壇における仮名書道界という事情があるのだとしても、しかしそもそも、それがいけない。／ さらに言ってしまえば、集に集合する人たちの仕事がつまらない。自分の中に書を見すえて仕事をしているとは、どうしても思えない。どだいわたしはあの、なよなよ、くねくねの脆弱な仮名書道てのが、気にいらない。／ にもかかわらず、何でもよいから書けという。人を知らぬ、気にいらぬの、そこでコメントしたのが、以下です。／――ご冥福を祈りながら――／ 日比野五鳳さんには、一面識もない。山科に移り住む前の洛北は紫竹にいたころ、着物姿で鴨川つつみを歩いておられるところを垣間見ても、知を得ることをしなかった。／ 難なく筆が高く舞う、ゆとりと豊かさの世界をそこに見てはいた。森田竹華さんと並べて東西仮名書きの図抜けた別格として位置づけてはいたのだが、下鴨のお宅に近くを利しての訪問面晤を考えなかったのは、多くの仮名書きの人たちへの偏見があったからだ。／ 変体仮名を駆使する、連綿体というやつ。倦むことなく踏襲される、あの姿態。さらには、こころね。こころばせのそこから睥睨の目もてすることこそ一大事ぞ、と言ってみたくなったりしていたからである。／ 日比野五鳳さんの晩年には作風の変化がおきつつあったと見る。一作ごとに一作を超える仕事をなさろうとされての試行錯誤の苦渋が見える。平安仮名に乗った巧みではもはや詮無いというところが出てきていたと見る。／ とにかくも、〈モ、栗三年柿八年ユズの大馬鹿十八年〉の作は、彼にとっては大きな意味をもつと言ってよい。はなち書きの称呼は平安期すでに見えていたとはいっても、しかしそこへの着目は五鳳さんの感性であり、五鳳さんの眼力であった。／ 気さくなお人であったと風聞する日比野五鳳さんの、今年は七回忌。ご冥福をお祈りしながらも、やさしくないことだがもっと丈夫で奔放自在なはなち書きの肝賢を思うとき、〈モ、栗〉後の書業がさらになお見たかった。」

一月十四日／作品押印／②-19

作品に雅印押し。

【解】 翌十五日「終日、雅印押し、完。」の記述、同手帳②-19に有り。

一月十八日／日比野五鳳展鑑賞／②-19

大丸での日比野五鳳遺作を見る。(註六十五)

(註六十五) 大丸で日比野五鳳遺作が展示されていた展覧会は、不明。

一月十九日／『墨』コメント送付／②-19

〝墨〟へ、五鳳へのコメント600字送る

一月二十一日／作品押印／②-19

午前、印押し。

一月二十五日／相澤美術館へ作品発送／②-19

午前荷造り、午后、相沢美術館に仮名24点、漢字6点、旧作小品2点発送。／膳所、西武でのマチス展を見、近くの義仲寺を見る。

一月二十七日／原稿執筆／②-19

義仲寺の文、作り。

【解】 翌二十八日にも同記述、同手帳②-19に有り。

二月二日／ガリ切り／②-19

ガリ切り。

【解】 翌三日にも、同記述、同手帳②-19に有り。翌々日四日「印刷、完。」同月五日「山階通信NO. 5、封筒書き。」の記述、同手帳②-19に有り。

三月三日／作品制作(ニジミ)／②-19

午后小山行。ニジミ少し出したいので、昨日は、〈粉連〉で駄目だったので〈綿連〉(註六十六)にしてみると、ややよいか。然し、ニジミはあまりそれに寄りかかるな。

(註六十六) 「粉連」、「綿連」はいずれも画仙紙の名称。

三月十日／作品制作(ニジミ)／②-19

午后、小山行。ニジミを気にして、世界小さくなるが如し。

三月十一日／原稿執筆／②-19

越後タイムス社送り予定の「桑山太市さんのこと」清書完。5枚。

【解】 翌十二日「越後タイムス社、吉田昭一郎氏宛、原稿速達で出す。」の記述、同手帳②-19に有り。同年三月二十四日と三十一日の二回に分けて週刊新聞『越後タイムス』に「桑山太市さんのこと――生田万の研究とその執筆の姿勢」(上)(下)の掲載あり。同年四月発行『山階通信』No. 6にも掲載有り。

日付不明(三月、二十三日までの間)**／相澤美術館へ送付の作品／③-16**

[相沢美術館]／○印送り済分／○[無碍](軸)／一息(〃)／○[花眼](二曲)／○[満堂](〃)／忘筌(〃)／○[刻野]裏打のみ／○[翼]裏打のみ／渕／○[己]／天心／久／○[川]裏打のみ／○[破]裏打のみ／恵／○[刻]裏打のみ／風無門自開(黒)／○[無]／瞬／○[風]裏打のみ／○[光][〃]／○[水]〃／○[地]／ことばの姿 江口草玄の書／ポスター＝二種類と／一思案して拝その後の蚊やの中／鼻先の思案が解けてトクリ哉／冷やの酒　昼寝哉

【解】 相澤美術館に所蔵されていた作品(相澤コレクション)から考えると、《無碍》(白寿p170、S41-10-3)、《一息》(同p170、S41-10-2)、《満堂》(同p173、S44-8-1)、《忘筌》(同p181、S55-F-2)、《刻野》(同p157、S30-11-1)、《翼》(同p161、S32-11-3)、《渕》(同p160、S32-3-1)、《己》(同p162、S35-10-1)、《天心》(同p164、S36-10-3)、《川》(同p166、S38-10-1)、《破》(同p163、S36-4-2)、《恵》(同p167、S39-7-2)、《刻》(同p166、S38-10-3)、《風無門自開》(黒)(同p167、S39-10-3)、《瞬》(同p168、S40-10-2)、《風》(同p169、S40-10-5)、《光》(同p168、S40-10-3)、《水》(同p169、S40-10-5)、《地》(同p168、S40-10-4)に該当する。なお《花眼(二曲)》の所蔵は無く、四曲一隻《花眼》(同p183、S56-F-16)が所蔵されていた。また、《久》は、《久遠》(同p163、S36-4-1)、《無》は(同p173、S44-F-1)と思われる。

三月二十三日／相澤美術館へ追加送付の作品／③-16

[まっかな嘘を火へくべて居／十二単の足のみたさよ／馬の姿も出ると戻ると]／右作品三点追加する。相沢美術館へ／91. 3. 23.／○郡定也原稿の件／○図録百冊購入の件／○案内状ハガキ二百枚／○タイトル／○作品全部寄贈申出のこと／[旧作の分で、未送作品を調べて、発送すること。他に、適当と思われる作品も一緒に送ること。]

【解】 相澤美術館に所蔵されていた作品(相澤コレクション)から考えると、《まっかな嘘を火へくべて居》(白寿p191、H3-F-1)、《十二単の足のみたさよ》(同p191、H3-F-2)、《馬の姿も出ると戻ると》(同p191、H3-F-3)に該当する。

三月二十七日／相澤美術館作品発送荷造り／②-19

午后小山行。旧作で未発送分の荷造り。

【解】翌二十八日「午后、小山行。荷造り完。三ヶ口。」の記述、同手帳②-19に有り。

四月三日／作品制作／②-19

午后小山行。これまで積んでいた端切れの紙を持ち出して制作再開。

四月四日／《啓上》制作／②-19

午后、小山行。「啓上」。

【解】《啓上》は未見。作品アルバムに無し。

四月六日／作品整理／②-19

作品整理。一寸赦すと甘くなる。ゆるしたら、いかん、甘くなったら、いかんぞ。

四月七日／作品整理とガリ切り／②-19

午前、旧作整理。／午后、ガリ切り。

四月十二日／ガリ切り／②-19

ガリ切り。

【解】翌十三日「ガリ完。」、翌々日十四日「印刷。完。」の記述、同手帳②-19に有り。『山階通信』No. 6（平成三年四月十四日付）を指す。

四月十五日／相澤美術館へ作品発送／②-19

相沢美術館へ、作品3ヶ口（旧作二次分）発送。

【解】前掲、同年三月二十七日の記述参照。

四月十六日／撫子の図／③-16

91. 4. 16.［艸］／退屈のまま［図29］

図29 「91. 4. 16.［艸］退屈のまま」（撫子と思われる。）

四月十七か十八日／子龍の古法に思うこと／③-16

（つぶしてあるが書き起こす）森田子龍が古法を言うは、よし。しかし森田子龍の体の中に有としてあり、無としてある、それでよいのに、彼は古法を説いた。説くことは客観化＝合理的詮索にほかならない。主観的な私と客観的な私との間に大きなへだたりがあるそれをあえてうめ（埋）ようとするところに、もはや、そこでは覚の立ち上ってくるところのものでなくなってしまう、そこ気づかずにいる彼。

【解】雑記帳類③-16の四月十七日記述の後、後掲、翌四月十八日の記述の前に記され、つぶされている。

四月十八日／草玄遺言書／③-16

遺言之事／○みんなに多くの感謝也／○葬儀のセレモニーは不要也。火葬後は骨も灰にして植物園のところから鴨川に流すべし。／○経は、坊さん不要。澄江からお経を読んでもらえばよし。／○［法音院山階草玄居士］／光明院と東寺での稽古場の諸道具は全部引きあげてきて、適当に処分すべし。／東寺は、机、

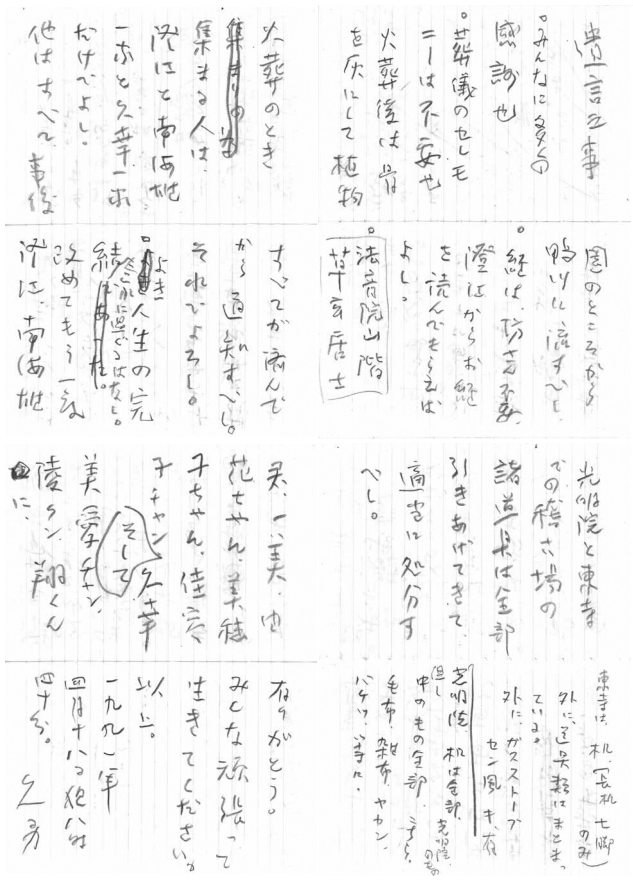

図30 「遺言之事　一九九一年四月十八日夜八時四十分」

（長机七脚のみ）外に、道具類はまとまっている。外に、ガスストーブ、セン風キ、有／光明院、机は全部、光明院のもの。但し、中のもの全部、こちら。毛布、雑巾、ヤカン、バケツ、等々。／火葬のとき集まる人は、澄江と南海雄一家と久幸一家だけでよし。他はすべて、事後すべてが済んでから通知すべし。それでよろし。／○よき人生の完結、これに過ぐるはなし。／改めてもう一度、澄江、南海雄君、一美、由花ちゃん、美穂子ちゃん、佳容子チャンそして久幸、美愛チャン、陵クン、翔くんに、有りがとう。みんな頑張って生きてください。以上。／一九九一年四月十八日夜八時四十分。久男。[図30]

【解】 右鼠径部ヘルニアの手術前日に残した遺言。同雑記帳類③-16にその前後の記述も有り。同月十七日「心肺検査。もう一回レントゲン。（中略）ようやく午后三時十五分。読書すれども退屈極まりなし。明後日の手術までが山。早く山を下りたき也。独り麦茶一碗喫するのみ。如何にせんすべなく、是また人生行路中の一修行なるか。」、同月二十一日「天上、壁のひび割れ　九一、四、二一、（日）第一日赤（北三）三五二号室[図31]（中略）／小心膽大、弱心膽強、［細心膽大］」、同月二十二日「今日、初めてホウタイ交換。↑このせいか、動くときに、痛み有。昨日より今日はまた少し歩きよし。一回毎の薄紙はがれ也。」、同月二十六日「抜糸。明日の様子で、明日入浴可能と。退院、二十九日（月、祭日）とする。」、同月二十九日「退院。」。また、四月十七日入院し、十九日手術、二十九日退院したことは、手帳②-19からも確認できる。同年四月十二日「第一日赤行。検査の結果、脱腸と。急遽、手術がよろしと。十日程入院と。／4月の稽古は休業とす。ガリ切り。」、翌十三日「午前、第一日赤行。入院申込。然し今はベットに空きがないと。どうなるのか。／ガリ完。」、同月十四日「印刷。完。」、同月十五日「相沢美術館へ、作品3ヶ口（旧作二次分）発送／第一日赤よりTEL有、明日入院と。」、同月十六日「一美の車で、澄江と三人で第一日赤行。10時入院。（中略）やっぱり病院、居心地よくなし。まして手術のことなど聞かされると（看護婦）、心まで病気になる。（中略）19日（金）手術と。」、同月十七日「6時、目をさます。熟スイ出来ずか。」と、手術前の不安が綴られる。同月十九日「鎮痛座薬、就寝前／手術、（右鼠径部ヘルニア）」、同月二十日「就寝前、鎮痛座薬。」、同月二十一日「朝食後、洗面、便所行で大きな放屁、気持ちよし。」、同月二十六日「抜糸。」、同月二十七日「初めて屋上へ散歩に行く。快晴新緑美し。」、同月二十八日「快晴。屋上散歩。」、同月二十九日「昼前、退院。」と、術後の記述も有り。そして、記述中の戒名と思われる［法音院山階草玄居士］は、前掲「平成元年（一九八九）日付不明／位牌案か／②-17」の[図19]参照、「大人」と「居士」の異同がある。

この手術は成功し、草玄は平成三十年（二〇一八）十一月十六日の逝去まで長生されるが、磯部一美、江口久幸姉弟にこの遺言を知っていたか確認したところ、知らなかった。しかし、実際の葬儀では、ほぼこの遺言通りで、葬儀は無宗派で執り行われ、読経は、奥様と娘婿の磯部南海雄が般若心経を上げたのみ。位牌は長男久幸が書した「江口久男」のみ[図32]。列席者もほぼ江口姉弟親族で営まれた。墓所はなく、令和四年（二〇二二）七月二十六日、奥様の遺灰とともに、鴨川ではなく柏崎沖の日本海に散骨された。

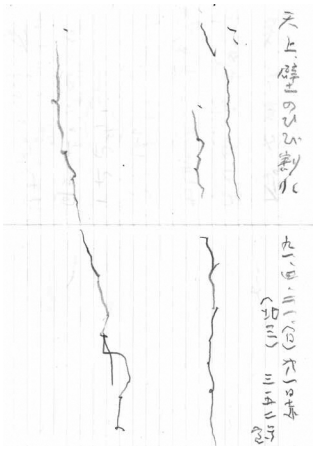

図31 「天上、壁のひび割れ　九一、四、二一」

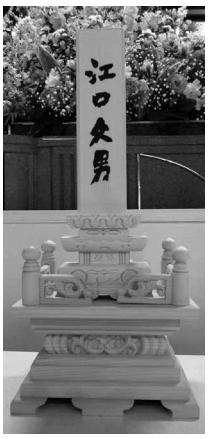

図32 江口久男位牌

日付不明（五月か）／**個と集の問題**／③-17

（×でつぶしてあるが書き起こす）書、つまり芸術という場における個に対する集の問題を否定にしか考えていない私

六月十三日／郡定也原稿落手／②-19

郡氏から原稿着。墨人の中での草玄の位置と屈折を然し深い論だてを避けて気楽に筆を運んでくれている。安堵也。／郡定也氏より原稿到着。

【解】 前掲、前年七月二十日に郡に依頼した原稿。郡は渡仏中で、六月九日付でフランスから原稿が送られてきたことが、原稿コピーで確認できる。翌年の相澤美術館「ことばの姿 草玄の書」図録に「草玄小考」の掲載有り。

六月二十日／作品制作／②-19

午后、小山行。草取り後、2ヶ月半ぶりに小品に筆を持つ。筆を持たないと、雑文への思考もドン化するようだ。筆を持たないでいると老人になるなという実感有。

七月十四日／原稿執筆／②-19

「雅俗」の稿、ようやく完か。夜半になる。

【解】 『山階通信』No. 7（同年八月発行号）に掲載有り。

七月十九日／柏崎市ふるさとまつり絵あんどん制作／②-19

柏崎絵行灯展の為のアンドン絵、二枚書く。

【解】《油照り羽入の小屋に寝て一人》(白寿p196、H3-7-た11)、《どれが上手か知れぬ大津江》(同p197、H3-7-た12)の二点。柏崎ふるさとまつり絵あんどん展は、同年八月十四、十五日開催。

七月二十一日／原稿推敲と作品制作／②-19

「雅俗」推敲／午后、小山行。／(中略)／反故の中に「台所で見るほやほやの娵」有。見落していたのだ。すぐ反故を捨てたらいけないようだ。

【解】《台所で見るほやほやの娵》は、未見。写真アルバムに無し。草玄の反故に対する考えは、昭和四十九年(一九七四)一月五日の墨人会創立記念研究会(京都・大和屋)での塩野松雲の研究発表「墨人の作品について」の中に、塩野が各同人に考えているところを問い合わせ、その返事の一つとして草玄の返事を取り上げている(『墨人』第二百二十三号、p37掲載)。以下、掲載部分「このごろ。反古、全部反古、書くことは書き反古を出すこと、ただそれだけのこと。反古はすべて、捨てない。どんな小さな、どんなに言葉の一部分しか書いてなくたって、原則的には全部、残しておく。反古を積むために反古を書いているのだから、それはとうぜんのことで、ただその空気の中に、どろどろとよどむこの身をどっぷりひたらせている。その中から必要に応じて表具屋行きということになるわけで、言うなら、まったく安直、安易という姿に見えるでありましょう。いい作品を書いて、みんに見せる、という対社会的相手意識とそのための意欲は喪失したと言ってもいいが、書き反古に囲まれ、書き反古に生きる主人公として座り、筆をもつこの身の今そこに呼吸する空気は、紙一枚ごとに新鮮であることは確かである。」

七月三十日／作品制作／②-19

午后、小山行すれど、手も心も観念化しているようで、面白くなし。真面目すぎるぞ。形くずれよ。

八月三日／ガリ印刷完と作品制作／②-19

午前、ガリ印刷。完。／(中略)／午后小山行。どうも乗れず。

【解】翌四日「封皮表書き。ガリ印刷、ホッチキス止め」、翌々日五日「山階通信投函」の記述、同手帳②-19に有り。

八月十四日／『書道芸術』から良寛原稿依頼／②-19

「書道芸術」から良寛へのコメント400字―500字で書けと。置いてあるものを取るような形、〝墨〟とは違う。〝墨〟では予め電話で打診の上、来るのに。

八月二十五日／『書道芸術』へ良寛原稿発送／②-19

〈書道芸術〉への良寛コメント、発送

【解】「良寛なごみの書」として『書道芸術』十一月号(同年十月発行号)に掲載。『山階通信』№8、同月十月発行号に掲載有り。

八月三十日／「応是酒」原稿執筆／②-19

終日、「応是酒」草稿作り。

【解】「応是酒」も『山階通信』№8に掲載有り。

十月八日／朝日新聞取材／②-19

朝日の松井氏(P.M.4:00頃から)、写真の渡辺氏(P.M.2:00)来り。

【解】記者・松井覚進とカメラマン・渡辺剛士。翌九日「朝9時来、小山行、そこで取材さる。」の記述、同手帳②-19に有り。後掲、同年十一月四日の記述のこと。記事は同月八日の朝日新聞夕刊に「現代人物誌「書家　江口草玄さん」として掲載有り。

十月二十日／作品制作／②-19

小山行。もう仮名書きは駄目か、手も頭も観念化してきているよう也。

十一月三日／作品制作／②-19

終日、作品選別。よいもの無しで参った。／品川区立O美術館、天野一夫氏からTEL有(墨象とその周辺展開催の件)。

十一月四日／朝日新聞取材／②-19

午后3時過、朝日の松井氏からTEL有。7日(木)夕刊に出る予定と。／寺泊の相沢直人氏へも松井氏、電話で江口のことを尋ねたというので、相沢さんへTELして、7日にでること言う。

【解】前掲十月八日の【解】参照。

十一月十日／「鈴木鳴鐸に思う」原稿修正／②-19

「鈴木鳴鐸に思う」を原稿紙に手入れしながら書き写す。そして、コピーする。

【解】『墨』九十四号(翌年二月二十一日発行)に掲載有り。

十一月十一日「鈴木鳴鐸に思う」原稿修正／②-19

「鈴木鳴鐸に思う」原稿推コウ。夕方、投函。／午前11時、O美術館、天野氏来、午后1時過帰る。森田が他の人をいやがると。それなら個展だと、くどいていた。困りもの／O美術館天野氏、来訪予定。墨、宗方氏へ、原稿、送。有一妻君から、夜、TEL有。

十一月十三日／朝日新聞から写真着／②-19

朝日、カメラマン渡辺氏から写真届く。／夜、墨、宗方氏からTEL有、鳴鐸絶筆有と。

十一月十六日／東京国立博物館行／②-19

東博の「詩歌と書」行。偶然、会場で石原則子氏と合う。（中略）午后4時発で帰る。

【解】同展は十月十五日―十一月二十四日開催。前日十五日「11:05ひかりで上京。」の記述、手帳②-19に有ることから一泊二日で上京していることが確認できる。

十一月二十三日／越後タイムス社の原稿執筆／②-19

越後タイムス社へ、新年号用の原稿、（旧稿）を清書する

十一月二十四日／作品整理と越後タイムス社の原稿送付／②-19

作品選別、100点程、捨てる。／（中略）／越後タイムスへ新年号用原稿、送る。

【解】前日二十三日に「新年号用の原稿、（旧稿）を清書する」とあるが、越後タイムスへは、翌平成四年（一九九二）一月二十六日付に「無心於事」が掲載されている。「旧稿」とあるように、『山階通信』No.1（平成二年一月十四日発行）の掲載分に手を入れて出稿している。

十二月二十一日／『響』誌原稿執筆／②-19

上京（中略）／夜、〝響〟原稿の草案作り。

【解】翌二十二日「山本弘一周忌法要（中略）午后5時東京発で、帰る。」の記述、同手帳②-19に有ることから、一泊二日で上京、宿で執筆したものと考えられる。

十二月二十三日／『響』誌原稿完／②-19

〝響〟審査の原稿、完。

十二月二十四日／『響』誌原稿送付／②-19

堀尾氏へ、原稿速達発送、／（中略）／伊藤森泉氏へ刻印二顆送る。「伊森泉印」「森泉」[図33・34]

【解】原稿は翌平成四年（一九九二）二月号の『響』に掲載された「みなさんの作品を見て」と思われる。堀尾松玄、牧野緑川、貝吹竹香、占部小龍、杉浦翠汀、森翠雲、鎌田華風の七人と子供たちの作品審査をしたことを、子供に向けて優しい言葉で記述している。

図33 《伊森泉印》2.0×2.0cm

図34 《森泉》1.8×1.9cm